

---

# 七つの宝玉

ラミレシア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七つの宝玉

### 【Nコード】

N7332V

### 【作者名】

ラミレシア

### 【あらすじ】

あらすじ

剣と魔法が息づく大陸メィアス。メィアスには七つの宝玉と七人の巫女が存在する。宝玉には大きな力が宿り、その力を巫女が管理する事によって人間と宝玉の共存が成り立っていた。

しかし突如として何者かが宝玉の一つである炎勇の宝玉を奪ってしまふ。水巫女であるリコは炎勇の宝玉が奪われた事を知り、水生の宝玉を守る為に幼馴染のケイトと遠く離れた水の神殿に向かう。

旅をへて知る謎と真実。リコ達は宝玉を守る事ができるのか？そし

て道中で出会うレアラとは。個性溢れるキャラクターによるハートフルバトルファンタジー。

## 侵入者（前書き）

王道ファンタジー第二作目です！  
お楽しみいただければ幸いです！

## 侵入者

この世界メイアスには光、闇、炎、雷、風、水、土と言う七つの宝玉が存在する。

宝玉は人に恩恵と災いを齎すと言われ、人々はその宝玉を大事に崇めた。

しかしその傍ら宝玉の力に魅了された人間も少なからずいた。

その為古代人は神殿を作り、巫女と呼ばれる女性のみが管理する体制を作った。

そして今時代が動こうとしている。

砂漠の中央に台形型の大きな建造物があった。

それは二メートル四方の巨大な石が積み重なって出来ており、どの石にも古代文字が書かれていた。

建物は砂漠と大きな岩に囲まれた場所にひっそりと建っている。

「もつじき炎勇の宝玉が手に入る。ククク・・・」

猫背をした白髪の老人が下卑た目つきで神殿を舐めるように見やる。その老人と建物を囲むように青い鎧を着た多くの兵士が立っていた。

一人の兵士が白髪の老人の下へ歩み出た。

「ガルニアス様。中へ入った兵からの連絡が途絶えました。

恐らくまたトラップに引つかかったと思われるです」

青色の鎧に青色の兜、それに黒いマントをした兵士がガルニアスの背後から膝を突き報告した。

「やはり巫女しか通る事を許されないというのは本当の様じゃのう」

ガルニアスは考える時自分の頭を指で触る癖がある。

その光景を見慣れている兵士は、ガルニアスが考えていると判断し黙って指示を待っている。

「あんまり時間も賭けられん。例のあれを試せ」

ガルニアスは口元に笑みを作った。

「恐れながら、あれを使えば魔術士が数名使い物にならなくなる上に、

神殿の中で生きている者がいた場合・・・」

「お主はわかっておらんのう。」

兵器は使ってこそ兵器なんじゃよ。それにあくまで実験じゃ。やれ。

「

は・・・はい」

兵士は喉を詰まらせたような返事をするとう重い足取りで下がった。

それから三十分後ガルニアスとその部下達は岩陰に隠れるように建物から離れた。

「ガルニアス様発射する準備ができました」

兵士が岩陰から神殿を見ているガルニアスに耳打ちした。

ガルニアスは頷くと右手を神殿に向けて振り上げた。

「撃て！！」

ガルニアスの声を確認すると兵士は無線機で何処かに連絡した。

その瞬間頭上に閃光が走った。

閃光と共に轟音と爆風が岩陰に隠れる兵士達を襲う。

兵士達は砂や埃に立っていられず身を屈める者もいた。

しばらくして辺りが落ち着きを取り戻した。

兵士達は立ち上がり岩陰から神殿を見ると半分が吹き飛んでいた。

そして神殿を貫通し背後にあった岩は跡形もなく消えている。

「素晴らしい！面白い！やはり我が国の兵器はこうでなくてはなし！」

ガルニアスは誇らしげに叫んだ。

その後兵士達を引き連れ神殿に歩み寄った。既に入り口は無くなり外から内部が剥き出し状態だった。ガルニアス達は神殿に登り大きく見渡すと、神殿の中央に一際赤く輝く水晶が浮いているのが見えた。それは丸く人の頭程の大きさをしていた。ガルニアスを先頭に瓦礫を避けながら水晶に歩み寄る。

「これじゃ・・・これが炎勇の宝玉じゃ！」

ガルニアスは色々な角度からジロジロと見ていた。

「誰か！魔力計を持って！」

ガルニアスが叫ぶと兵士の一人が長い棒の様な物を差し出した。

魔力計を宝玉に近づけた途端魔力計が爆発する。

ガルニアスと背後の兵士は啞然としていた。

「凄い・・・これがあれば・・・」

ガルニアスは不適な笑みを浮かべた。

「これは人が触れるでないぞ。何が起こるかわからん。

金属の入れ物に入れて持ち運ぶ。すぐに取り掛かれ！」

ガルニアスの掛け声と共に兵士は一斉に動き出した。

「はあはあ・・・これは一体どうなってるの・・・」

二十歳前であろう女性が、呼吸を整えつつ岩陰から崩れ落ち荒れ果てた神殿を眺めている。

女性は髪を後ろで一つに括り、スラリとした体系で目が大きいのが特徴的だった。

彼女は近くの岩に手を置き言葉無く神殿をじつと見つめる。

「ラズリ様！・・・ちよつと待つてください・・・」

四十歳程のでっぷりとした体系の男性が、息を切らしながら砂漠を走ってくる。

男性がラズリと言う女性に追いつき、呼吸を整えようとしている。

「ラズリ様、里から神殿まで何も言ってくれないなんて酷いですよ・  
・」

「コデオ、これを見て判断しなさい。これが現実よ」

コデオの泣き言にラズリは淡々と言葉を返す。

コデオは顔を上げて神殿を見て啞然とした。

「これは・・・・一体何が・・・・」

啞然とするコデオを他所にラズリは神殿に駆け寄る。

瓦礫を避け宝玉が祭つてある場所へ行くと蛻の殻だった。

ラズリの感情は戸惑いから怒りに変わっていった。

「誰がこんな事を・・・・大変な事になるぞ・・・・」

ラズリは唇を強く噛み締めた。

## 侵入者（後書き）

ラミレシアの新シリーズを読んでいただきありがとうございます。  
今後とも長いお付き合いよろしくお願いたします。

## 旅立ち（前書き）

ついに主人公登場です。  
では本編スタートです！

## 旅立ち

突然コズの里、通称水の里に火の里から連絡が届き、私は里長に急遽呼ばれ里長の家に来ていた。

「なんですって!」

私は椅子から飛び上がり木でできた机を叩いた。

「リコ様落ち着いてくだされ。まだ水生の宝玉は奪われておりません」

白髭を長く生やし目が細い里長は、両手を上げてリコと呼ぶ少女を宥めようとした。

「まだって、炎勇の宝玉は既に誰かに奪われたんでしょ？」

これが落ち着いていられますか!？」

大きな声を出す私に困惑気味な大人たち。

私は里長を含めた周りに集まる大人達を掻き分けるようにして外に出た。

それに伴って里長と大人達も慌てて外に出てくる。

私は振り返り自分の胸に手を当てて言った。

「良い? 私達は水の里に生まれ、水生の宝玉に生かされてる!

もう私達にとつて宝玉は無くてはならない物なのよ!？」

水生の宝玉を守っていく義務がある! そうよね? 里長!」

「そうじゃが・・水の巫女であるお主に危険があつたら・・・」

私の質問に白髭を弄りながら視線を下に向け弱気に応える里長。

「私なんてどうでもいいのよ。水の巫女は妹でもやれるでしょ!

でも水生の宝玉に代わりはないのよ!」

私はそれだけ言うと自分の家に向けて走り出した。

私は十五歳で名前はリコ。

特に取り柄はないんですけど、しいて言うなら巫女をやっています。

家は代々巫女の家系で、母が引退した現在私が巫女当主をやっています。

私は坂道を走りながら、長い黒髪を腕に何時もつけてある輪ゴムで左右で二つに結ぶ。

そして、ハート柄のピンをポケットから出し前髪を左右に止めた。坂道で一旦止まり大きく息を吸い叫んだ。

「ケイト！至急来なさい！」

私の高い声は小さな里に響き渡る。

そして私はまた坂道を走り出す。

塀が見えてきたのでそれを走って飛び越えると家の屋根に乗った。

屋根が軋む音がし、屋根から飛び降りると母が私の頭に拳をくれた。

「いったーい！」

大声を出し涙目で後ろを振り返ると、怒った表情の母がいた。

「また屋根を壊す気かい！？巫女らしくしなさいって何時もいつてるでしょ！？」

私は痛みを堪えながら抗議の声をあげる。

「お母さん大変なのよ！水生の宝玉が危険なの！」

母は面倒そうに私の言葉を聞いている。

そんな母に里長の話を聞かせると、母の表情は真剣なものとなった。

「なんですって！？里長ものんきな・・・」

クリスタルが奪われたら世界の人々が困る事になるって言うのに・・・

母は呆れたような表情で文句を言った後私を見た。

「行くんでしょ？水の里の巫女として」

母の真剣な顔つきに私も真剣に応える。

「当たり前よ。えーっとなんだっけ、

私達人間は水と共に生きる！水無くして人は無し！だっけ？」

私の言葉に笑った後「正解！」と言うと私の背中を叩き、母は急いで家の中に入って行った。

母が家に入った後、私は馬小屋に行き愛馬を外に出した。

「セリス。長旅になるからよろしくね」

セリスと呼ぶ馬に私は撫でながら話し掛けた。

近くの井戸に走り水を汲むとセリスに水を飲ませる。

私も水筒を用意し、乾した魚を大きな葉っぱで包んで鞆にしまった。巫女装束を着たままだった事を思い出し、家の中に入ると母が何やら忙しなく動いている。

そんな母を尻目に私は動きやすい民族衣装に着替えた。

再度外に出て旅の準備をしていると、短剣を腰につけた少年が馬に乗ってやって来た。

「リコ、いきなり何だよ、今から父さんと狩りにでるんだ」

頭に紐を巻き短い髪を逆立てた少年が不機嫌そうに伝える。

「ケイト、私今から旅に出るから里の事頼むね」

私の急な言葉に馬の上で啞然とするケイト。

「待て待て。一体どういうことだ。話が読めん」

「ついさっき火の里から使者が来たのよ。」

炎勇の宝玉が奪われた、注意されたしつてね」

私は馬の世話をしながら質問に淡々と応える。

「それとこれとどういう関係があるんだよ」

「あんたほんとバカね。」

炎勇の宝玉が盗まれたら次は水生の宝玉が盗まれる可能性が高いって事わからないわけ?!」

私は不機嫌に伝えるとケイトは「そうか!」と一人で納得していた。

「そういう事だから、この里の事頼んだからね。」

水の里は若い人少ないんだから。」

私は投げるように言い放つ。

「ちよつと待て、水生の宝玉がある場所まで一人で行く気か!？」

「当たり前でしょ。今の時期は里にとつても大事な時期。」

今の時期に収穫が失敗したら大変な事になるわ」

「いや・・・でもな・・・」

ケイトは何か悩んでる表情だった。

「いつ行くんだ？」

「今からよ。一刻を争う問題だしね」

「俺も行くぜ！リコを一人で行かせるわけにはいかない！」

ケイトは真剣な表情で私を見つめてくる。

「ケイトがいたって役にたたないじゃない。」

剣術だって私のほうが強いし、何も出来ないじゃない」

私の言葉にケイトは悔しそうに押し黙る。

馬の手入れを済ませると、後片付けをし馬に跨った。

そして旅の相棒である水生の欠片とナイフを懐から出し、刃が欠け

てないか確認した。

何か考え込むケイトに振り返ると真剣に見つめた。

「ケイト、里の事頼んだわよ」

そう言うと、私は里長に今から出る事を報告に馬を走らせた。

坂道を上がり里長の家に着くと馬を下りた。

扉をノックすると里長が顔を出した。

「もう行くのかね？」

「はい。一刻を争いますし、万が一宝玉に何かあれば大惨事です」

私の言葉に難しい表情をする里長。

「リコ様なら剣術、巫女術、身体能力全てにおいて里一だから心配ないとは思いますが、

くれぐれも無事に帰ってきてください」

「わかっています。何かあれば水鳥を飛ばして伝えます」

私はそれだけ言うとお辞儀をして馬に跨った。

再度お辞儀をした後、私は妹のサーニヤに会う為里の外れにある川に向かった。

川の辺に行くと妹は友達と水遊びをしていた。

「サーニヤ！」

丘の上から大きな声で叫ぶとサーニヤは気付いた。

「あ！お姉ちゃん！」

私はゆっくりと丘を降りてサーニヤの元へ馬を歩かせる。

サーニヤは友達の輪から外れこっちに走ってきた。

髪を後ろで一つに括った色黒の妹が声をかけてくる。

「お姉ちゃん馬に乗って何処に行くの？」

「少し旅に出る。しばらく会えないかもしれないけど、巫女の修行はちゃんと行うようにね」

サーニヤは羨ましそうに私を見上げる。

そんな妹の頭を軽く撫でると、サーニヤは気持ち良さそうに目を細めた。

「時間が無いからもう行くよ。時間があれば水鳥出すから。」

サーニヤも水鳥出せるように修行してね」

私の言葉にサーニヤは元気良く返事をした。

「後これ渡しておくね」

サーニヤの手を持ち上げ、手の平に「水巫女」と書かれた小袋を置いた。

その袋は青い糸で刺繍されており、不思議な事に水の幕で覆われていた。

「お姉ちゃんこれ！？」

サーニヤは目を大きくさせ私を見つめる。

「何があってもこれが貴方を守るわ。絶対に体から離さないでね」

私は軽くウインクするとサーニヤは嬉しそうに微笑んだ。

再度サーニヤの頭を撫でた後、手を振って別れた。

再度馬の上から振り返ると、サーニヤはまだ手元の小袋を嬉しそうに見つめていた。

母に挨拶して行こうと里外れの自宅に向かうと、家の前で母は鞆を持って待っていた。

「お母さんそろそろ行くから妹の修行ちゃんと見てね」

「大丈夫よ。ほら、これお弁当。長旅になるだろうから、体に気を付けてね」

母は馬の横に鞆を括りつけてくれた。

「私を誰だと思ってるの？お母さんの娘で水巫女よ？ちゃんと宝玉を守ってくれるわ」

私は胸を張って応えたと母は笑った。

それにつられて私も笑みを零す。

「亡くなつたお父さんも貴方を見守ってるわ」

母の言葉に私は笑顔で頷いた。

そして馬の上から母と別れの抱擁を交わした。

「それじゃ行ってくるね」

「いつてらっしゃい」

母に手を振りながら里を出た。

私は馬に揺られながら用意した鞆の中身を確認していた。

「地図持ったし、方位磁針も持ったし大丈夫ね。」

一人で行くのは初めてだから、近くの里に寄って行こうかな」

私は地図を広げ現在地を再度確認する。

「今が最南端の水の里だからとにかく北の方角ね。」

砂漠も通るからネバルゲ村で補給したほうが良さそうね」

周りを見ると水の里だけあって木が鬱蒼と生え、その合間を川が沢山流れている。

「しばらくはこの風景ともお別れなのね」

私は名残惜しそうに風景を見渡す。

すると後ろから馬の足音が追いかけてきた。

「リコー！待てよ！」

私は馬を止めて振り返るとケイトが走ってきた。

「どうしたの？」

ケイトは猛スピードの馬を私の前で止めた。

「どうしたじゃないよ。俺も行くって」

「ケイトじゃ足手まといだって言ったでしょ？」

ケイトは少し考えた後口を開いた。

「俺・・・リコが好きだから！一緒に行く！

親の許可も得てきた！頼む連れて行ってくれ！

リコより強くなってリコを守りたいんだ！」

私はなんて返事すれば良いか分からなくて戸惑ってしまった。

ケイトは真剣な表情で私の言葉を待っている。

「ま・・・まあ、そこまで言うなら勝手にすれば？面倒は見ないわよ？」

「やった！これでリコと結婚できる！」

手を上げて喜ぶケイトの頭を引っぱたいた。

「誰も結婚するなんて言っただけじゃないわよ！？」

勝手な妄想やめなさいよ！」

ケイトは馬から落ちそうになっていた。

そんなケイトをほっといて私は馬を進ませた。

私とケイトは馬を並ばせて歩く。

「ケイト、このまま行って荒原に出たら馬を走らせるから、それまで歩かせてね。」

此処ら辺は沼地もあるから落ちたら馬が大変な事になるわ」

話しながら横を見ると、ケイトは後方で馬の足を止めていた。

「あんた何やってんの？歩きなさいよ」

私が言うとケイトは引きつった顔を向けてきた。

「沼地に落ちたみたい・・・」

私は啞然とした後顔に手を当てた。

「前途多難すぎる・・・」

ケイトと一緒に馬を沼から引っ張りあげた後、

こつてりお説教をしながら進んだ。

五時間程歩いた後荒原が見えてきた。

「リコ！荒原までもうすぐだぞ?!」

はしゃぐケイトを他所に私は地図を確認する。

「このまま真っ直ぐ行くわよ」

私の言葉を聞いているのかわからないけれど、

ケイトは周りを珍しそうに見渡している。

はしゃぐのも無理もなかった。

実際に水の里から出れるのは限られた大人と巫女だけだからだ。

1年に1回、各里の巫女が宝玉に御礼の儀をする事が義務付けられている。

この時に守護人と称して限られた大人の男性が数人ついて行くだけだからだ。

実際数百年前に一度、水巫女が大病で御礼の儀を行う日が遅れてしまった時、

各地で水難が多かったらしい。

これは水の里で一番物知り婆さんことユン婆の言い伝え。

荒野に向けて歩いているとケイトが突然話を振ってきた。

「なありコ、水生の宝玉に毎年御礼の儀をやりに行ってるけど、どんな事をするんだ?」

私がつくりと肩を落とした。

「あんた学校で何を聞いているのよ!？  
ほんとに・・・どうしようもないわね」

私は一呼吸終えた後面倒そうに説明した。

「世界にはね、水生の宝玉、炎勇の宝玉、土命の宝玉、雷怒の宝玉、  
風気の宝玉、闇憎の宝玉、光導の宝玉

って言う七つの宝玉があるのは知ってるわよね?」

ケイトは私の横で頷く。

「各宝玉に付き、一つの里が守護里として付くの。つまりこの場合  
巫女が付くって事ね。」

巫女は与えられた宝玉を浄化と守護の二役を担うの。  
その役割のもう一つが宝玉の浄化。

宝玉には一年を通して悪い物が蓄積するの。それを浄化するのが巫  
女の役割。

そして宝玉の欠片、宝玉の抜け殻とも言われるけど、それを回収し  
命を吹き込むのも巫女の役割なのよ。

結果御礼の儀をやらないと、不吉な事が起きると言われているのよ  
私がケイトの方を見ると目を瞑り腕を組んで一人で唸っていた。

私は溜息を付いて今後の旅に思いを馳せた。

荒野に出ると見晴らしが良く、大きな岩が至る所に点在するのが見  
てわかった。

方位磁針で方角を確かめ、ネバルゲ村を目指し馬を走らせる。

「リコは此処通った事あるの？」

「あるわよ。でも今回はいつもルートが違うからなんとも言えな  
いわ。」

今から行くネバルゲ村も今回が初めてだもの」

私の返答に、ケイトは「そうなんだ」と分かってなさそうに返事を  
した。

「一旦あの岩陰で休んでいきましょ」

ケイトは私の言葉に了承した。

岩陰で私は大きな声をあげた。

「身支度何もしないで出てきた？！

それじゃ、飲み物も食べ物も何もなし！？」

「だって急な事だったし、リコは先に行っちゃっさ……」

私は祈るような気持ちで空を見上げた。

(神様助けて)

「ほら、これあげる」

私は水筒とお弁当を差し出した。

「え！？くれるの！？リコありがとう！」

怒ったって何の解決にもならない事と、怒るとそれだけ体力が消耗するから私は肩を落とすに留まった。

「分かってるけど、あえて聞かせて・・・お金も持ってきてきてないんでしょ？」

「持っていないよ」

躊躇わず答えるケイトを本気で殴りたいと思った私だった。

周りを見渡しているケイトは何かを見つけた。

「リコ、あれ何だ？」

私が荷物を整理しているとケイトが声をかけてきた。

私は荷物から双眼鏡を取り出し見てみると、

狼の形をした魔物三匹に追われた小さな子供二人が荒野を彷徨っていた。

私は走り出し馬にすぐ跨った。

「おい、どうした！？」

「小さな子が魔物に襲われてる。ケイト行くわよ！」

私は無我夢中で走り出した。

子供達の所へ近づくほど現場は鮮明となる。

(子供達は傷だらけだわ・・・このままじゃまずい！)

「ケイト！荷物持ってて！」

私は荷物を後方にいるケイトに放り投げた。

それを慌てて受け取るケイト。

私は懐から小さな宝玉の欠片を取り出し、

右手で握り締め高く手を上げた。

「宝玉の欠片に秘められし力我が此処に解放する！」

私の体を青白く透明な膜が包み込む。

そして、弓で矢を射るポーズを取ると右手が更に青白く輝く。魔物に狙いを絞り力強く射た。

「当たれ！」

掛け声と共に青白い光が放たれた。

光は魔物三匹の腹部を捕らえ吹き飛ばす。

ケイトは後ろで驚愕していた。

「す・・・すげー！」

「まだ魔物は死んでないわ！すぐに子供達を回収する！」

私はふらついてる子供達に近寄ると足枷がついていて驚いた。

「何これ・・・」

ケイトは短剣を取り出し、馬上から魔物の様子を見ている。

魔物はふらつきながらも立ち上がり、涎を垂らしながら赤い眼光を子供達に向けた。

「ケイト！このままじゃ子供達を運べない！時間を稼いで！」

「おうよ！俺の出番ついにきたな！」

そう言うときケイトは馬から降り私の背中を守るように狼と対峙する。

私は短剣で足枷を切ろうとするが壊れない。

少し悩んだ拳句再度魔法を使うことにした。

虚ろな目で荒野の上を這ってでも歩こうとする子供達。

短剣で子供達の足に衝撃が加わらないように鎖を固定し魔法を解き放つ。

鎖は途中で切れ、子供達は足に鉄の輪は付いてるものの重さからは開放された。

意識が混濁する女の子と男の子を馬に乗せる。

背後では噛み付いてくる狼の牙と短剣がぶつかり合う音が聞こえる。

「ケイト子供達を乗せた馬を岩山へ誘導して！」

此処は私が引き受けるから！」

私の言葉にケイトは何か言おうとしたが、押し黙り指示に従った。

ケイトは子供達の馬を連れて走り出す。

私は敵と目を合わせながらゆっくりと後退していく。

（やっぱりこの魔物毒持つてる・・・かすり傷でも致命傷になる・・・）  
襲い来る一匹目の牙を回転して避けると頭上に短剣を突き刺した。

二匹目の牙を上段蹴りで打ち払い、三匹目の牙を再度回転して避けた後上から背中へ短剣を突き刺した。

二匹は絶命し、一匹は微かに動いていた。

私は息を切らしながら魔物を見つめる。

そんな私を岩山から戻ってきたケイトが回収してくれた。

## 旅立ち（後書き）

読んでいただきありがとうございます！  
更新がんばります！

## レアラ（前書き）

悪魔契約者の方も書きたいんですが、どっちも書きたい！ラミレシ  
アですw

七つの宝玉が落ち着き次第書きたいと思います！

## レアラ

岩陰に行くと十歳前後の子供達は苦しそうに唸っていた。傷口を見ると毒に汚染されている傷口が多数目に入った。

「まずいわ・・・このままだと数時間で死んでしまう」

私の言葉にケイトも不安げに子供達を見つめる。

辺りを見渡すと多少草が生えているのが見て取れた。

「ケイト近くにある草木を手当たり次第に取ってきて、薬草として使えるかもしれない」

「わかった！」

私の緊迫した言葉にケイトはすぐに走り出した。

自分の鞆を漁り毒消し薬を取り出した。

その毒消し薬を見て不安があつた。

（毒消しの量が足りないかもしれない・・・ケイトが持つてくる薬草に賭けるしか・・・）

不安を振り払い毒消し薬を子供達の傷口に塗りつけていく。

毒消し薬を塗りきると、子供達に水を口に流し込みながら二人の回復を見守った。

いつの間にか夕暮れになっていて幸いな事に日中の暑さは弱まっていった

「リコ、リコ。起きろ」

目を覚ますと目の前にケイトがいた。

私は眠気眼をこすった後ケイトを見た。

「遅かったから眠っちゃったじゃない。それで草木はどうだった？」私の言葉にケイトは馬を指差した。

馬の背中を見ると山ほど草木が積んであつた。

すぐに駆け寄り使える物があるか確認すると、毒消し草も大量に混

ざっていた。

「ケイトよくやったわ！これでいけるかもしれない！」

私は眠り続ける子供達の様子を再度確認した後で、毒消し薬作りに取り掛かった。

辺りは暗闇になり月の光だけが私達を照らす。

小型の乳鉢で薬を作っていると、胡坐をかいたケイトが岩山の天辺から話しかけてきた。

「リコはほんと何でもできるんだな」

私はケイトの方を向いた後また薬草作りに目を落とす。

「何でもできるわけじゃないわ。できる事しかやらないだけよ」

暫しの沈黙が流れる。

「ケイトも・・・良くやったわ・・・ケイトがいなかったら二人を助けられなかった」

私は薬草を作りながら言うと、ケイトは月を見上げながら嬉しそうに笑った。

明朝私達は子供達を看病する傍ら食料の危機に貧していた。

「この荒野付近には川も食べ物もない。

一番近くて村に行くしかない。

でも子供達はまだ目を覚まさない・・・」

私は一人唸っているとケイトが見回りから戻ってきた。

「リコ！なんか拾ったぞ！」

「おお！食べ物?!」

私が嬉しい声をあげながら岩陰から覗くと、ケイトは見知らぬ少女の首襟を掴んで持ち上げていた。

見たところ私達より少し年下に見えた。

「あんた！何誘拐してきてるのよ!？」

「いや、誘拐じゃねえよ、行き倒れになってた所を「俺に」くっついてきたんだ」

淡々と喋るケイトに私は暑さもあつてか腰を落とした。

「どうするのよ・・・食べ物もないのに食い扶持ばつか増えちゃつて・・・」

私は空を見上げながら泣きたい気持ちだった。

「食べ物ならあるぞ？」

「へ？」

ケイトが言うには岩山から割りと近くに食料があるらしく、子供達の看病をケイトに任せて私は見に行く事にした。

ケイトが示す位置に着き、砂利で隠された五メートル四方の木板をどけた。

「こ・・・これは!？」

中を見ると水が入った瓶が百瓶前後、それに暑さに強い干し肉や梅干、乾し魚まであった。

「凄いやつだわ・・・緊急時用の食料と思って間違いないわね・・・」  
私は生唾が喉を通った。

しかし子供達が先と思い、水一瓶と食料を少し持って岩山に戻った。

岩山に戻ると交代でケイトに三日分の食料と水を取りに行かせた。

私は寝ている子供達の毒消し薬を新しい物に交換し水を飲ませた後、行き倒れの少女にも水を飲ませた。

行き倒れの少女は髪を二つに分けお団子の様に括っていた。

そして何より洋服が高級素材で出来ているのが目に入った。

「この子何処の子かしら・・・服装も此処ら辺で見かけないわ」

私は一通り少女を観察した後、食料をどうやって寝てる子供に食べさせようか考えた。

考えた末にでた結論は、気を失ってる子供に堅い物は食べさせられない。

でも栄養は取らないと傷の治りも遅い。

私は怪我で寝ている子供達の前に立ち、食べ物を口でほぐし少量づつ子供達の口に入れた。

しかし、喉を通ってくれなかった。

私がか子供達の前で悩んでいると、後ろでお団子少女が目を覚ました。そしてすぐに立ち上がると、懐からナイフを出し睨むように威嚇してきた。

私もすぐに立ち上がりお団子少女と対峙する。

「落ち着いて。私は敵じゃないわ。ナイフを下ろしてくれないかしら？」

両手を頭上まで上げ私は相手を宥めようとしたが、一向にナイフを下ろす気配がない。

そんな状況の中ケイトが食料を持って帰ってきた。

「おう、お団子！起きたのか。食料持って来たぞ」

ケイトの言葉に少女は一瞬で喜びの表情に変わった。

ケイトに駆け寄ると乾し肉と水を貰い食らいついた。

その光景を唾然と見つめる私。

食料と水に食いつく少女を他所に私はケイトを手招きし、小声で問い詰めた。

「あなた、あの子に何したの？なんか懐いてない？」

「さあ、リコがない間に一回お団子が目覚めて、食べ物を求めていたから、

もうじき来るぞって言ったただけだぜ？」

「そ・・・そう・・・」

私はなんか納得できないまま話は終わり、私達は少女を眺めた。

御腹が満腹になったのか座り込み一息ついて私達を見た。

「ケイトありがとう。童はレアラと申す。命拾いしたぞ。感謝する」

レアラと名乗った少女は偉そうにケイトに話しかけた。

「さっきも一応言ったが、俺はケイト、こっちは俺の……リコだ」

私はつい手が出してしまった。

「いつから私はケイトの物になったのよ！それに何で照れながら言っただ！？」

「まあ堅い事は気にするなよ。子供が見てるぞ？」

怒る私に対して宥めようとするケイト。

この構図がどんな風に少女に移ったかわからないけれどレアラは怒り出した。

「童のケイトに何をする！事と次第では万死に値するぞ！」

少女は立ち上がり再度私にナイフを向けた。

私とケイトはレアラを見て啞然とするしかなかった。

その後はケイトが少女に誤りも多分に含まれていたが説明をして落ち着かせた。

「それじゃリコは、ケイトにとって「ただの」旅仲間が良いのじゃな？」

レアラは事細かくケイトに質問している。

私はそんな二人を放って寝ている子供達の看病をする事にした。

「いいや、リコは大事な仲間だよ」

ケイトの言葉にレアラは口を尖らせた。

「所でレアラは何で荒野で倒れてたの？」

ケイトの質問にレアラは言い難そうに顔を背けた。

「ケイト、言い難そうにしてるのよ。無理に聞かない方がいいわ」私のぶっきらぼうな言い方にレアラは表情を落とした。

「童は・・・逃げてきたのじゃ・・・」  
レアラはそう呟くと岩陰に一人で歩いて行ってしまふ。  
それからレアラは体を丸め何処か遠くを見ているようだった。  
私とケイトは顔を見合わせるとレアラをそっとしておく事で同意した。

夕方頃に男の子が目を覚ました。

「大丈夫？痛むところはある？」

まだ頭が覚醒していないのか返事がない。

しばらく経って男の子は辺りを見回し、

隣に女の子がいる事を確認すると少し安心した表情を見せた。

しかし自分の足に付く鉄の輪を見て表情を歪めた。

「此処は何処なんですか？」

男の子は薬草を研いでる私に声をかけてきた。

「此処はネバルゲ村の近くにある荒原地帯よ。」

距離は正確にはわからないけれど、大体一日半で着く距離ね」

男の子は話を聞いた後何かを考えるような表情をした。

そんな男の子に優しく声をかけた。

「自己紹介遅くなったけど私はリコ。旅をしている道中で貴方達を見つけたの。」

あんまり詮索はしたくはないのだけれど、

その足枷の意味だけ教えてくれないかしら？」

男の子は辛そうな表情をし俯いたまま黙り込んだ。

私は眠っている女の子の傍らに座り傷を確かめ、毒消し薬を体の各部に塗りこんでいく。

そんな私をみて男の子は口を開いた。

「僕達の・・・ネバルゲ村の皆が金色の服を着た連中に捕まりました」

私は驚愕した。

「どついう事?!」

「正直僕も何がなんだかわかりません・・・。

ただ巫女を出せと言いながら突然村に攻めてきたんです。

抵抗する者は殺され、従う者は捕まりました」

男の子は目を瞑り辛苦の思いで拳を強く握った。

私は脈打つ鼓動を抑えながら黙って男の子を見つめていた。

しばらくすると女の子も目を覚まし、レアラも気分が落ち着いた様子だった。

私は暗闇の中余った枯れ草で火を起こした後簡単な料理を作った。

ケイトも不器用ながらも手伝ってくれた。

火を5人で囲みながら座り食事を取った後、レンは改めて自己紹介をしてくれた。

「遅くなってしまいました、僕はレン、こっちが妹のリンです。

レン、リンと呼んでください。

それと、助けてくださって本当にありがとうございました。

皆さんがいなかったら本当に死んでいたと思います!」

改めて深く頭を下げるレンにケイトは「そう堅くなるな」と笑いながら撫でた。

「レンとリンは体の具合はもう平気?」

私の言葉に笑顔で返して来た。

「もう大丈夫です。本当に助かりました」

私も笑顔を返した。

そして本題とばかりに私は皆の顔を見て話す。

「明日からなんだけど、私達はネバルゲ村へ向かうわ。

早朝には此処を立つつもり。」

私の言葉に暫しの沈黙があった後レアラが手を上げた。

「童もついて行って良いのか?」

レアラは自分を指差し真っ直ぐ私を見てくる。

「いいわ。でも私の言う事聞ける?」

私の質問にレアラは嫌そうな目を向けてきた。  
そんなレアラを見てケイトは頭を撫でた。

「言う事聞けるよな？」

ケイトはレアラに笑顔で聞くとレアラも笑顔で頷いた。

その光景を見て私はどっと疲れが増した気がした。

気持ちを切り替えてリンとレンを見る。

「私達も連れて行って貰えますか？」

逃げ出して来た身ですが、母と父それに友達の事がきになります・

「

レンは暗い表情で私に聞いてきた。

「それじゃ一緒に行きましょう。」

明日は早朝から出発するから早めに皆体を休めてね」

私の言葉に一人を除いて全員が了承した。

村の中心にある大きな建物に金の鎧に金の兜をした数人が集まっていた。

その中で椅子に一人だけ座り、頬に真新しいナイフで切られた跡が残る三十台と思いき男が怒鳴る。

「巫女はまだ見つからないのか！？もう三十時間は過ぎてるんだぞ

！？」

男は机を蹴り飛ばし怒鳴り散らす。

横に整列する兵士は誰かが応えるだろうと思いい誰も喋らない。

沈黙の空気に耐え切れず一人の兵士が一步前へ出た。

「それが・・巫女は一年に一度御礼の儀という儀式以外は何処かに身を潜めてるらしいのです」

兵士は動揺しながら喋るが、頬に傷の男は興味なさそうに悪態をつく。

その直後別の兵士がノックをして足早に入ってきた。

兵士は地に膝を突き報告する。

「ルーフェンス將軍、たった今村人の情報では此処より更に南下した場所に小さな里があるそうです」

「距離はどれくらいだ？」

「馬で2日から3日程です。車なら2日とかからないかと」

ルーフェンスは顎を撫でながら考えている。

「わかった・・・第九部隊と第十部隊をその里に向かわせる。百人もいれば余裕だろ。」

第一銃撃部隊も連れてつていいぞ」

そう言うと隅で控えていた兵士が大きな声で返事をした。

「俺は水の神殿に戦車を連れて向かう。この村は第八部隊に守らせておけ。」

各部隊全員明朝すぐに動き出せ！」

そう言うと部屋にいる兵士全員が返事し部屋から出て行った。

ルーフェンスが窓から外を見ると足枷を付けた村人が一列に整列している。

「炎の神殿はガルニアスに先を越されたが、水の神殿は俺が貰う」  
ルーフェンスは自分に言い聞かせるように喋った。

## レアラ（後書き）

読んでいただいております^^  
もっともっと書きます！

皆をリコの世界へ招待いたします！

憎しみ×妖精×思い（前書き）

ラミレシアです。こんにちわ！

毎日小説の事考えています！

ではリコの世界へいつてらっしゃい！

## 憎しみ×妖精×思い

朝日が昇ると同時に私達は馬に跨りネバルゲ村へ向けて出発した。リンとレンは私の前に座り、レアラはケイトの前に座っている。

朝のうちにはリンとレンとレアラは眠たそうにしていたが、

頭がやっと働きたしたのか1時間程歩いた所でレアラが口を開いた。

「ケイト、ネバルゲ村へは後どれくらいで着くのじゃ？」

レアラは後ろにいるケイトに質問するとケイトは唸って悩んだ拳句私に視線を送ってきた。

私は肩を竦めた後鞆から地図を取り出し位置を確認する。

「後1日って所よ」

私が答えるとレアラはわざとらしく顔を背けた。

(私絶対嫌われてる・・・)

私は軽い溜息を一つついた。

太陽の位置からして十五時を回っていた。

暑い荒野の中水を皆で回し飲みしながら進む。

「具合が悪い人はいない？いたらすぐ言ってね」

皆暑さにやられて返事がなかった。

悩んだ拳句岩山を見つけ休憩を取る事にした。

岩山の影に着くと、リンとレンとレアラは座り込み動かなくなった。

私とケイトは食料と水の確認をした後で現在地を確認した。

「後十時間も歩けば着くわね。」

私は地図と方位磁針を使い進行方向を確認する。

「リコも休んだ方が良くないか？」

ケイトは私の身を案じてくれている。

「大丈夫よ。それよりも馬を気遣ってあげて」

私の言葉にケイトは少し不満そうな表情をした後馬を見に行った。

すると突然背後から声がした。

「リン！大丈夫か？！リン！？」

振り返るとレンが慌てた様子でリンの名前を連呼している。その動揺っぷりにレアラも横で目を大きくしている。

「どうしたの？レン」

私が声をかけるとパニックに陥っていた。

「リンの動きが変で頭を触ったら凄く熱くて！」

パニックのレンをリンから剥がし私は症状を確認した。

「凄い熱・・・40度近くあるわ・・・」

それに熱中症の症状も出てる」

私はリンを地面に寝かせると鞆を漁り解熱効果の薬草を取り出した。

「レン、水をケイトから貰ってきて布を濡らしリンの脇と首、頭を冷やして！」

私の言葉にレンはケイトの元へ走って行った。

後ろではレアラが啞然と見ている。

私は薬草を小さな乳鉢に入れ磨り潰す。

レンとケイトは一緒に走ってきた。

「何が起こった？」

ケイトの言葉に私は短く返す。

「リンが熱を出したの。水くれる？」

「ああ。」

私は出来た薬草と共に水をリンに飲ませた。

後は早く熱が引いてくれるのを待つしかなかった。

レンはリンの体をとにかく水で冷やした。

しかし夜になってもリンの熱は引かなかった。

それと同時に私も焦りを感じていた。

もしかすると肺炎かもしれないと。

そして決心した。

「レン少し離れててくれる？」

熱を全部取り除くから。」

私の言葉に対して不思議そうに見つめてくる。

「大丈夫。私に任せておいて」

私は儀式の準備をした。

地面に胡坐をかき目の前に宝玉の欠片を置く。

宝玉の欠片は透明ではなく少し黒ずんでいた。

「宝玉の欠片に秘められた力を我が此処に解放する！」

言葉と共に私の周りを青白い幕が覆う。

そしてゆっくりと膜が私から離れリンの体を包み込む。

それとは逆に黒い煙がリンの体から抜け、

宝玉の欠片に入った後私の体に飛び込んできた。

一瞬胸が苦しくなったがすぐに治った為私は特に気にしなかった。

離れた所からレンとレアラ、ケイトは儀式の一部始終を見ていた。

リンは次第に顔色がよくなり、正常な呼吸を取り戻す。

しかしそれとは逆にレンは体を震わせ虚ろな目で私を見つめている。

「お前が・・・」

レンは脱力してる私に近づき抱きしめた。

そして私の懐からナイフを取り出し私の胸へ突き刺した。

私は咄嗟の出来事で全く反応できなかった。

私は倒れて行く時レンの目を見つめていた。

レンは巫女である私を憎むように睨み付ける。

私は心の一部に穴が空いたような気分で地面に倒れこんだ。

血が服を染めていく。

薄れていく意識。

(死ぬのかな・・・私・・・)

ケイトとレアラが何か叫んでいる。  
そして私の意識は途切れた。

呆然と立ち尽くすレンにレアラが掴みかかり押し倒すと胸倉を掴んで叫んだ。

「あんた何してんの!？」

リコはあんとリンの命を救ったのよ!

一生懸命救ったのよ!

ふざけんじゃないわよ!

あんたには分からないでしょうけどね!

巫女は全ての犠牲なのよ?!」

レアラはレンの体の上に乗りがかり息を切らす。

「レアラもう止める!今はそれ所じゃない!」

ケイトは二人を引き剥がした後すぐにリコに駆け寄った。

レンは呆然とリコを見つめ、レアラは悲痛な面持ちで拳を強く握った。

ケイトはリコの傷の具合を服の上から確かめる。

「出血が酷い・・・後で怒られるの承知で服を脱がすぞ」

ケイトは意識が無いリコに言うとう着を脱がせ肌着にした。

傷口は心臓より僅か下だった。

鞆から厚い布を出すと傷口に当て包帯で巻いた。

ケイトに今できる事はそれしかなかった。

「頼む出血止まってくれ・・・」

ケイトは祈る思いで横たわるリコを見つめる。

レアラは虚ろな目でリコを見るレンを睨みつける。

リコの手首を触り段々弱くなる脈にケイトは体から血の気が引いていくのを感じた。

ケイトはもう何も考えられなくなっていた。

「どうしたらいい！誰か教えてくれ！」

ケイトはリコに向かって大声で叫んだ。

止め処なく涙が溢れる。

その時馬に括りつけられた鞆から青く輝く小さな光が飛び出してきた。

よく見ると光の正体は妖精だった。

妖精は青い花びらの洋服を身に纏い、髪が長く整った顔立ちの女性だった。

その場にいるケイトとレアラは珍しい妖精に釘づけになった。

「リコ様の命は私が救います。少し離れていてください」

妖精は啞然と座り込んでいるケイトに早く離れるように身振り手振りしている。

ケイトが離れると妖精が勢いよくリコの胸に飛び込んだ。

私は真つ白い空間に一人彷徨っていた。

「此処どこだろう・・・」

辺りを見回しても何も無い。

何があったのか目を閉じて思い出す。

「レンに刺されたんだ・・・」

そっかそっか・・・」

私は一人でつぶやくと同時に、レンの目を思い出し少し辛くなった。

今まであんな目を向けられたことは一度もなかった。

私は一生懸命正しい事をやってきたつもりだった。

皆から褒められて自分は良い事をしてるんだって思ってた。だから私はがんばってこれた。

自分の思いが自分の中で大きくなる。

私は間違っていたのだろうか……。

私は白い空間から段々暗い空間に落ちていく。

「まだ闇に落ちるのは早いですよ。水巫女のリコ様」

私の上空から優しい声が聞こえてくる。

「誰……」

問いかけと共にゆっくり上を見上げると青白く光る何かが落ちてきた。

そして私の目の前で止まると青白い光が喋った。

「初めまして、リコ様。私は先代水巫女様に使えておりました、テリアスと言います」

とても綺麗で透き通る声が私の耳に入る。

光が落ち着きよく見ると青い花びらの服を着た妖精だった。

沈みかけていた体が急に止まり、私は妖精を真っ直ぐ見つめる。

「先代って……お母さん？」

私の問いに頷くテリアス。

「先代アーシャ様のご指示で鞆の中に入り、リコ様についてきたんです。そしてアーシャ様は私にこう言っていました。

”きつとリコは自分を信じて正しい事をする。

それが自分に何か災いが降りかかろうとも正しいと思えばやってしまおう。

だからテリアス、リコをお願いね”

私は此処にいない母を思い出すと涙が溢れた。

テリアスはまだ言葉を続ける。

「だからリコ様に私の命を与えます」

私は顔をすぐ上げテリアスに問い詰めた。

「どういう事？命を与えるって・・・テリアスはどうなるの？」

「私は自然に戻ります。妖精に生まれアーシャ様にずっと仕えて来れて本当に良かったと思うんです。

アーシャ様の子供も見れましたし。今度は私の子供を見守ってくださいませんか？リコ様」

私はどう応えていいのかわからなかった。

でもテリアスの真剣な気持ちは私の胸に届いた。

「でもレンは私を憎んでいた・・・どうすればいいのか・・・」

私の言葉にテリアスは笑顔で応えた。

「まだ悩む事はないんじゃないんですか？そうですね、簡単に言えば、

まだこれからだ。ではないでしょうか？」

テリアスの言葉の中に一瞬母を見た気がした。

「そっか・・・まだこれからだね。私がやるべき事は。

ごめん、泣き言言うなんてほんと私らしくない。

テリアスありがとうね！」

私の体は段々と上へ昇っていく。

テリアスも私についてくる。

そして私の胸にテリアスは私の思いに呼応するかのよう飛び込んだ。

目を覚ますと砂の上に寝転んでいた。

「此処は……」

右を見るとケイトは涙を浮かべ啞然としながらこちらを見ている。

「ど……どうしたの？ケイト」

「リ・・リコ！リコオオ！」

ケイトは寝転ぶ私に抱きついてきた。

良く見れば私は肌着のみ。

「キヤアアアアアア！」

私は絶叫すると共にケイトを思いっきり殴っていた。

吹き飛び動かなくなるケイト。

周りを見渡すと私の服が落ちている。

恥ずかしがりながらもすぐ服を着た。

「ハアハア・・一体何！？」

私は再度倒れているケイトを見る。

次第に私の背中に視線が二つ向いているのを感じ振り向くと、

レアラとレンが驚きで目を丸くしていた。

私は座り込んでいるレンと目が合うと真剣に見つめ返した。そしてレンに向かって歩いていく。

私はレンの前に来ると立ち止まり、しゃがみこんだ

レンは怯えた表情で私を見る。

私はレンを優しく抱きしめた。

「レン、私は貴方が思うとおり巫女よ。貴方の村で何があったかわからない。

貴方が私を快く思っていないのもわかった。

でも私は貴方の村へ行つて皆を助けるわ。  
もうやれる事はそれしかないから。

レン・・・ごめんなさい」

私はそれだけ言つとレンから離れ、倒れているケイトを起しに行つた。

その後レアラとレンは何かを話していたが私は知らない。  
でももうやるべき事は目の前にあるんだと強く心に叩き付けた。

気絶しているケイトを岩陰に運びこんだ後、

今更だがレンに刺された場所を確認すると完全に完治していた。

「テリアス・・・お母さん・・・」

二人の事を思うと胸が温かくなった。

寝ているリンに近寄り具合を確かめると気持ち良さそうに眠っていた。  
た。

あんまり良く眠っていたので私はもうしばらくそつととして置く事に  
した。

私がリンに近づく時からレンはずっと私に視線を投げかけている。  
その視線が妙に胸を騒ぎ立てるので、私は荷物を整理し気持ちを落ち着かせようと考えた。

地面に落ちている鞆と宝玉の欠片を拾い上げ岩陰に移動し腰を降ろした。

そこへレアラが珍しく歩いてきた。

「リコちよつといい？」

私はリコを見上げた。

「ん？どうしたの？」

レアラが立ったままだったので私は横に座るように誘導した。

「どうしてあんな事したの？リンは死ぬ運命だったでしょ？」

私はレアラにそんな事を聞かれるとは思っていなくて驚いた。それと同時にこの子は巫女の事を知っていると思った。

「うーん。救える命だったから？」

私の言葉にレアラは目を見開いた。

「貴方バカ?! 宝玉の結晶がもう既に限界来てたの知ってたでしょ?!」

「知ってたよ。勝手に体が動いちゃったの」

「自分の命が危険に晒されるのに？」

「私の命なんてたいした価値なんてないわ。」

それよりも私には守りたい物があるの」

レアラは信じられないような目で私を見る。

「童は……」

レアラは急に視線を地面に向け黙りこんだ。

「レアラとこんなに沢山話すのは初めてだよね」

私は下を向いているレアラを他所に一人空を見上げながら言う。

「レアラは私の事嫌い？」

私の質問にレアラは何も応えない。

「私はレアラの事好きだよ。」

少しだけ聞こえてた。レアラがレンに言った言葉。

ありがとう、レアラ」

私はレアラの頭を軽く抱き寄せた。

レアラは啞然と私を見上げたがすぐに下を向いた。

気のせいかもしれないけれど、レアラが少しだけ笑った気がした。

しばらくするとケイトは意識を取り戻し、準備をしている私に怒ってきた。

「リコ! 酷いじゃないか! 心配した俺にいきなり殴るとか!」

「いや・・・つい・・・ごめん！」

レアラからナイフで刺された時の状況を聞いていた私は、頭を下げてケイトに謝った。

そんな私達を見てレアラは隅で笑っていた。

私達も釣られて笑ってしまふ。

その後はケイトも準備に加わってくれた。

レアラは私とレンの溝を気にしてか、積極的にレンに話しかけて誘導してくれていた。

私はケイトと馬の手入れをするレアラに近寄って頭を撫でた。

「ありがとう。レアラ」

私は一言だけ言うつとすぐにその場を後にした。

準備が終わると今度はレアラの提案により馬に乗る配置を変えた。

ケイトの前にレンとリンが乗り、私とレアラが一緒に乗った。

一同はネバルゲ村を目指す。

憎しみ×妖精×思い（後書き）

読んでいただきありがとうございます！  
まだまだ書きます！またきてね！

## 大切なもの×胸騒ぎ×作戦（前書き）

こんにちわ！とにかく思いをぶつけるラミレシアです。

いつも読んでいただいております！

リコ達は村を目指します。

果たしてそこで待っているものは・・・

では本編スタートです

## 大切なもの×胸騒ぎ×作戦

日が傾きかけた頃馬上でレアラが突然振り向き私に聞いてきた。

「ねえ、リコ。あの時言ってた守りたいものって何？」

「ん？あの時？・・・ああ」

岩陰でレアラに言っただ事を思い出した。

「私の大切なものは妹サーニャよ」

「サーニャ？」

私は頷いた。

「私が絶対に守らないといけない人よ」

「どうして？」

私はレアラの質問に言おうか迷った。

「うーん、他の人には言わないでね？」

レアラは頷いた。

「妹はね、魔力がとても高いの。私なんかとは比べ物にならない程にね。」

本人は未だに自分でわかってないみたいだけど。

私のお母さんが言ってたの。サーニャはあの魔力ゆえに災いを齎す側にも、齎される側にもなるって。

だから私とお母さんは妹を絶対守るって誓い合ったの」

私は口元に手を当てた。

「これは私の思いだから絶対秘密よ？」

レアラは笑顔で頷いた。

「今度はレアラの大切なものを聞きたいわ」

私の質問に対してレアラは表情を落として前を向きつぶやいた。

「童の大切なものは、母上とサヤナ」

私は聞いてはいけなかったかなと思いき無難な返答に留めた。

「そっか。私と同じで大切な者がいるんだね」

私の言葉にレアラは何も言わない。

ただレアラの体が小刻みに震えていた。

しばらく行くと左斜め前方から土埃が舞うのが確認できた。

「あれは・・・」

私達は馬を止め、双眼鏡で確認すると金の鎧を着た人達だった。

（あれはまさかレンが言っていたネバルゲ村を襲った人達じゃ・・・）

ケイトに双眼鏡を渡すと私はレンとリンとレアラにこの事を言うべきか悩んだ。

ケイトも双眼鏡で確認すると私の方を向き、

お前に任せる的な目を向けてくる。

私は恐がらせない為にいう事はやめた。

「魔物の群れの様だわ。放っておきましょう。」

ネバルゲ村までもうすぐよ。急ぎましょ。」

私は何故か胸騒ぎを覚えた。

（でも金の鎧の人達が乗っていた乗り物見たことなかったわ・・・。一体なんだろう・・・）

私達はそれから数時間馬で走り朝日が昇る頃ネバルゲ村付近の岩陰に入った。

レンとリンは馬から下りると疲れと不安から黙ったまま岩陰で座り込んだ。

レアラはケイトと共に馬に水をあげている。

私は水分を取りながら双眼鏡でネバルゲ村の様子を確認する。

そこへケイトがやってきた

「リコこれからどうする？レンの話じゃ村は占領されてるんだろ？」

「ええ、見たところ見張りは十名ほどね。それに見たこと無い棒の

様な物を持っているわ」

ケイトは私から双眼鏡を借り覗き込む。

「長さが中途半端な棒だな。戦いにくそうだ。剣の方がよっぽど良い」

様子を見てる私達にレンは私達に声をかけてきた。

「金の鎧を着た人達が持つ棒は危険です・・・」

とても大きな音が鳴った後に村人数人が倒れこんだんです」

レンは表情を落とす。そんなレンをリンが心配そうに覗き込む。

「金の鎧？何の話？」

気付けば私の横にレアラが立っていた。

そしてケイトに駄々をこね双眼鏡を奪い取った。

そんなレアラとケイトを尻目にどうやって村に入ろうか考えていた。

「何で・・・どうして・・・」

怯えた声のレアラに目を向けると双眼鏡片手に震えながら後ずさりをしていた。

表情を見ると見たくないものをみてしまった様な顔をしている。

「レアラ？どうしたの!？」

私はレアラの異変に気付き倒れそうになった所を地面すれすれで抱きとめた。

レアラは声にならない声をだしていた。

私は正気じゃないレアラの頬を軽く叩くが一向に表情は変わらない。

「レアラしっかりして!」

「レアラに何が起こったんだ？」

「わからないわ。でもとても怯えている。」

私とケイトの会話にリンとレンも不安が隠せない。

レアラを岩陰で横にさせ、レンとリンにレアラの事を任せた。

「レアラの事も気になるけれど、此処で待機してるだけじゃ村の人は助けられないわ」

私の言葉にケイトも頷いた。

「でもどうする？あの村は中から見晴らしが良いし、村まで距離が

ある」

「そうね。それに中の様子が全く分からないしね」  
私とケイトは頭を悩ませた。

「そうか！」

私は手の平を叩き大きな声をあげた。

「距離があるならそれを逆手に取ればいいのよ！」

「距離があるから悩んでるんだろ？」

「そうなんだけど、そうじゃないの！」

変な目でみるケイトに、私は落ちてる木を拾い地面に図を書いた。

「簡単に言つと岩陰に敵を誘い出し、そこで一網打尽にすればいいのよ。」

距離が開いてれば、相手側にトラブルが生じた時敵は駆けつけるしかないからね」

私の説明にケイトは頷く。

「しかし誘い出す図は誰がやるんだ？」

そこまで考えていなかった私は困った顔で唸り声をあげた。

「僕にやらせてくれませんか？」

レンが突然私達の話に入ってきた。

私は断ろうと思ったがレンの真剣な眼差しに言葉を詰まらせた。

「ずっと考えていました。リコさんの事。」

僕とリンにとつて命の恩人なのに、僕はリコさんを刺しました。

あの時の僕は自分達の事しか考えていませんでした。

本当にごめんなさい。

できれば償いをしたいんです。

こんな事じゃ償いきれませんが・・・」

私は頭を下げ謝るレンをじっと見つめた。

「レンの気持ち痛いほど伝わったわ。」

だから私は何も言えなかった。

レンは辛い思いをした。

巫女だからじゃなくて、人としてレンの気持ちを受け止めたかったのよ」

私の言葉に涙するレン。

私とレンの会話をじっと見つめるケイト。

「なあ、レンにやってもらわないか？

レンがそれで少しでもリコに対する気持ちにケリが着けられるなら、それはそれで良いだろ？それに危なければ俺達が守れば良い」

ケイトの提案に私は迷った拳句頷いた。

「分かったわ。レンにお願いするわ。いいかしら？」

私の問いにレンは涙を拭いて大きな声で返事をした。

リンに事情を話し、寝たままのレアラを任せて岩場を変えた。

高さ五メートル程の巨岩の元に着くと私は説明を始めた。

「レンは私達が敵をこの岩陰で処理できないと思ったら馬で遠くまで逃げて。

その後をケイトが追いかけるから。

村の敵兵の注意がレンとケイトに移ったら私は村に侵入するわ」

「だが、リコが危なくなる！」

私の説明にケイトは嘔み付いた。

「レンを守りきれなければ私を守る事はできないわ。

だってお母さんに言われたもの。リコは自分から危険に身を投げるってね」

私は笑ってケイトに言った。

ケイトは呆れた表情でもう何も言ってこなかった。

「リコ、もし相手が大勢で来た時魔法使うのか？」

村の様子を確認している私に聞く。

「最悪使うわ。極力使わないようにするけど」

ケイトは心配そうに聞く。

「レアラから聞いたけど、宝玉の欠片に負担かけない程度にした方がいいぞ」

「わかってるわ。今はもう平気よ。」

（何故かさつき確認したら浄化されていたし、不思議なんだけど・・・）

私はケイトの心配を他所に岩の上部にて隠れた。

その横にケイトも上がってくる。

岩の下には馬2匹とレンが私の合図を待っていた。

隣にいるケイトに小声で声をかける。

「ケイト武器は極力使わないで。レンがいるから血は流したくない」

「わかってる。素手の方が得意だ」

やる気だけはあるケイトを他所にレンに決行の合図をした。

レンは岩陰で疲れ気味に岩場周辺を歩く。

双眼鏡で村の様子を確認する私達。

「気付いた！1, 2, 3・・・3人走ってきてるわ！レンに岩陰にゆつくり入るように伝えて！」

ケイトは頷くとレンの前に小石を落として、岩陰に入る合図をする。

岩陰に入り神妙な面持ちで敵を待つレン。

それを上から見守る私達。

岩横から敵が顔を出し、ゆつくりと歩いてくる。

「こんな所に逃げてやがったか！連れて行け！」

一人が大声で二人に指示をするとレンに歩み寄る。

私は偉そうに指示をした一人目の背後に降り立ち、頭に思いっきり上段蹴りを入れた。

「なにこれ！？堅い！？」

金の兜に直蹴りを入れるととても堅かった。

ケイトは二人目に頭上から直接覆いかぶさり動きを封じる。

それを見て状況が読めない3人目の敵は動揺しているようだった。

私は1人目が動かない事を確認すると3人目に素早く近寄り背後を取った。

そして思いっきり押し倒すような蹴りを入れる。

私は用意してあった縄で1人目と3人目の体を素早く縛った。

「ケイトそっちはまだ?！」

私が見上げると、ケイトは敵を投げ飛ばし壁に叩きつけている所だった。

ケイトはボロボロの体で動かなくなった敵を縄で縛った。

その様子を見て私はほっとした。

「出だしは成功ね」

敵の3人を再度まとめて縛り上げ、金の兜を取り外した。

「思ったとおり兜は取れ難くなるようにホックで止まっていたわ。

脚痛かったけど、まあ良かったかな」

私は自分の足を撫でながら言った。

兜を脱ぐと全員男性で年齢は二十歳後半程だった。

「今は気絶してるから良いけど、時間の問題だぜ?

今からどうする?」

ケイトは敵三人を見ながら不安げな声を出した。

「まだまだ敵を釣るわ。ケイト不安げな声出さないで!

私達はもうやるしかないのよ?」

ケイトは私の声を聞いた後レンを見て気を引き締めた。

「そうだったな。悪い」

ケイトは敵兵の鎧を剥いで着用した。

「これ防御性はあるけど重いな・・視界も悪いし」

ケイトの言葉に私は巨岩の上から様子を見ながら言った。

「そこが弱点よ。ケイトも相手の弱点を見分けなさい。

むやみに攻撃したって致命傷にはならないわ」

「わかつてるって」

私の忠告にケイトはさらりと受け流す。

レンは私の指示で馬に乗り不安げに私達の方を見ている。

ケイトは敵の持っていた武器を手にとつて珍しそうに見る。

「この堅い棒、先端が穴あいてるな。」

初めてみるぜ。この穴何か飛び出そうだな。」

ケイトが手当たり次第に触っていると「ズガン！」と大きな音が鳴り響いた。

私は振り返るとケイトの表情が強張り、手で持っていた棒の先端から魔力風が漏れていた。

「ケイト何があつたの?!」

「いや・・・俺にもよくわからん・・・ただ、何か棒の先端から飛び出た・・・」

私が岩の上から降りて発砲先を確認すると地面に数センチの穴が開いていた。

「これは・・・風の魔法よ。ケイトいつから魔法使えるようになったの?!」

私の質問に啞然と立ち尽くすケイト。

「ちよつとそれ貸して」

私は筒の棒をケイトから奪うように取ると特に変わった所はなかった。

しかし穴が開いてる場所を見つけると、中から親指程の丸型をした玉が見つかった。

「何これ・・・宝玉!?・・・いや・・・違う、

宝玉の欠片を加工したんだわ。それに浄化されていない・・・。こんなもの人の体内に入ったらとんでもない事になるわ!

私は怒りと悔しさを噛み締めるように筒の棒を握り締めた。

「こんなもの一体誰が・・・」

ケイトの方を振り向くと別の筒の棒を触っていた。

「ケイト、その武器は使ってはだめよ。大変な事になるわ」

「どういう事だ？」

「その武器から飛び出る玉は、浄化されていない宝玉の欠片を人の手で加工し作ったもの。」

それを強制的に魔法に変換し威力を高め発砲していると思う。

だからその玉を受けた者は死後魔物になる可能性がある」

私が辛そうに言うと、ケイトは驚愕していた。

「まじかよ・・・」

ケイトは手に持つ筒の棒を地面に置いた。

筒の棒の事ばかり気にして忘れていた。

「あ、こんな事してる場合じゃない！

次の敵を誘いこまなきや。」

ケイト誘い出して！」

私は持ち場に帰りながらケイトに指示を出した。

「わかった。いくぜ！」

ケイトはそう言うと敵の鎧と兜を着用し応援を呼ぶ格好を取った。

私はこの時頭を過ぎった。

（あの玉がレンとケイトに向けられたら危険だわ！）

私は急いで宝玉の欠片を取り出しいつもの様に詠唱する。

次第にレンとケイトの周りを透き通った青色の膜が覆う。

レンは驚いたが私と目が合うとすぐに冷静になった。

ケイトは兜で見えていないようだった。

私は敵の武器を知った事でこの戦いがハイリスクになったことを知った。

（シールドを張ったけど・・・一発でも貰えば致命傷は必死ね・・・）

私は敵の出方を固唾を呑んで見守った。

リンは自分の横で魔されているレアラを心配そうに見つめる。

「レアラさん……」

リコが置いていってくれた水を飲ませたり、布に水を含ませレアラの額を拭う。

そんな二人に多数の人影が迫る。

「貴方達此处で何をしているの？」

女性の声が突然リンの背後から聞こえた。

リンが振り向くと紫色で染められた民族衣装をきた女性が立っている。

女性は髪が短く耳に紫色のイヤリングをした二十台後半程の女性だった。

その女性の後ろには似た衣装を着た男女が沢山列組んで並んでいる。

リンは怯えつつもレアラを守ろうと必死だった。

「私達は……えとえと……」

女性はリンが隠そうとするレアラを覗き込むと驚愕した。

「レアラ皇女!？」

「ひゃ!？」

女性の大きな声にリンはびっくりして変な声をあげた。

「だ……だめです!レアラさんに近づかないでください!」

リンは近寄ってくる女性を身振り手振りでレアラに近づけないようにした。

「え……皇女様?」

リンは困惑した顔で後ろに振り返った。

女性は振り返るリンの前で改まって自己紹介を始めた。

「突然すまなかつた。私はフィレーネ。闇の神殿があるガジェットという町から来た者だ。

後ろの者は皆聖騎士団のメンバーで私の仲間」

堂々と振舞う女性の前にリンは動揺してしまう。

「あやや・・・わわ・・・私は・・・リリンです」

視線が定まらないリンにフィレーネは優しく声をかける。

「リンさん落ち着いてください。少しお尋ねしたい。」

どうしてリンさんの後ろにレアラ皇女がこんな所で寝ているんですか？」

フィレーネの熱い視線と質問それにレアラ皇女と言う言葉に混乱し、リンの頭から湯気が立っていた。

「はわわ・・・」

リンは小さな声と共に倒れこんだ。

フィレーネはリンを地面すれすれで抱きとめた後、奥で眠るレアラをじっと見つめた。

しばらくして、フィレーネの後方にいる集団の中から一人の男性が駆けながら声をかけてきた。

「フィレーネ隊長、いきなり少女を抱き込んで何やってるんですか！？」

フィレーネは振り返った後怒りながら短髪の男性に反論した。

「私は何もしてない！勝手に倒れ込んだんだ！」

短髪の男性は背が高く、目が細めだった。

フィレーネはリンをゆっくり地面に寝かせて立ち上がり、気持ちを切り替えるように男性に聞いた。

「ギルダ、町の様子はどうだった？」

ギルダと呼ばれた男性は少し惚けたような顔をして立っている。

「特に大きな動きはないですね、」

ただこの反対側に岩場があるみたいでそこへ数名兵士が走っていきましました。

何かあるんですかね？」

ギルダは頭を掻きながら不思議そうな顔をしている。

「それを調べるのがお前の役目だろう！？早くいってこい！」  
ぼさっとしているギルダにフィレーネは大声をあげた。

そんなフィレーネにギルダは冗談っぽく言った。

「そんなに怒ると嫁の貰い手いなくなりますよ?」

フィレーネはその言葉に対して素早く上段蹴りを入れるが、ギルダは素早くしゃがみ避ける。

「それじゃいつてきます!」

ギルダはそれだけ言うのと走って行ってしまった。

「ほんとにあいつときたら・・・」

フィレーネはギルダが走って行った方角を見ながら、拳を握り怒りを露にしている。

そんなフィレーネに長髪で軽くウェーブがかかった女性が歩み寄り声をかける。

女性はフィレーネと同じ年位で落ち着いた雰囲気を漂わせていた。

「まあまあ、ギルダにも悪気はないんですから・・・」

「悪気はない?! 嫌味だろ!?!」

長髪の女性の言葉にもフィレーネは食って掛かった。

フィレーネは少し怒気を含めながら腕を組み、長髪の女性に声をかける。

「ソフィア副隊長、皆に各岩場で休憩取るように指示したのか?」

「はい。もちろんです。フィレーネの指示はちゃんとやりますから。」

「  
「たまに聞いてくれない時あるが?」

「それも愛情ですわ」

フィレーネの言葉にソフィアは声を高らかにあげて笑っている。

そんなソフィアをフィレーネは白い目で見つめる。

フィレーネは気持ちを切り替え岩場で横たわる二人の少女をじっと見つめる。

「でも、なぜ此処にレアラ皇女がいるのか・・・やはり闇の神殿襲撃された件と関係あるのか・・・?」

フィレーネは一人悩みに更けた。

私は双眼鏡を手に取りながら後方へ叫んだ。

「今度五人来たわ！レンはもうちよつと後方で待機して！ケイトは早く鎧を脱ぎなさいよ！」

私の声にはレンは不安げに馬の手綱を握り移動する。

ケイトは重い鎧を岩陰で脱ぎながら私に声をかける。

「リコ！こいつら起きないかな？もう大分時間経ってるぞ？」

「起きたら私に任せなさいよ！とっておきがあるわ！」

ケイトの不安を他所に私は自信を持って反論した。

岩横に筒の棒を持った兵士5人がやってきた。

それを岩の上から見守る私とケイト。

そして一人の兵士が声をあげる。

「おい！あれ見る！さつき行った3人が縄で縛られてるぞ！？」

5人の兵士は3人に駆け寄る。

私達は一気に上空から1人目と2人目の兜に蹴りを入れる。

二人は倒れたまま動かない。

「ケイト後3人よ！棒には気をつけなさい！」

「わかつてるつて！」

私とケイトはこちらを見たまま動かない3人を前に気合を入れなおす。

そして私は3人目の兵士の背後に素早く回りこみ手で押し倒す。

そのまま4人目の足元を蹴り転ばす。

転んだ3人目と4人目の兜を素早く剥がし首元に拳を入れ気絶させた。

5人目の兵士はケイトとやり合っている。

その姿を確認し私は5人目の兵士を挟むように回り込む。

そして後方から胴体に蹴りを入れ、同時にケイトが地面に体をつけ

勢いで投げ飛ばした。

地面で微かに動いている5人を見た後私とケイトは動き出す。

「今からが本番よ！ケイト馬使っていいから！レンと一緒に注意を引いて！」

「リコはどうするんだ！馬が無いと動けないだろ！？」

「私には魔法があるわ！なんとかする！ケイトの方こそ絶対捕まるんじゃないわよ！」

私とケイトはお互いに再度目を合わせ強く意思を伝わらせた。

その中に絶対成功させるという思いも籠めて。

ケイトとレンが岩陰から馬で出て行った。

私は倒れこむ5人と縄で縛られる3人の兵士をじっと見ながら思いを強くした。

（もう戻れない！絶対に村の皆を助けるんだ！）

私は双眼鏡片手に荷物を背負い村の様子を岩横から観察する。

ケイト達の事と村人達の事を考えると鼓動が早まる

村の兵士達が動き出す瞬間がとても待ち遠しく感じた。

**大切なもの×胸騒ぎ×作戦（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。  
では第6章でお会いしましょう！

信じる心×不安×妖精×魔剣（前書き）

こんにちわ！小説を書き足りない人です！

えっと今回の話は新キャラが多分に含まれます。

ぜひとも歓迎してあげてくださいw

では本編スタート！

## 信じる心×不安×妖精×魔剣

双眼鏡でじつと村を見ていると遂に動き出した。

馬がない馬車のような乗り物二台に、兵士が一台につき5人程乗りこんでいる。

（やっぱり馬がない！？何あれ！？どうやって動いてるわけ！？）  
村の様子に驚きながらも、今度はケイト達の行動を双眼鏡で追う。  
私の右手後方で大きく円を書くように走っていた。

（ケイト達・・・頼むわよ！）

ケイト達の無事を祈った後再度村に双眼鏡を戻す。

すると兵士が乗った乗り物は勢い良くケイト達に向かって走り出していた。

その速さに私は驚く。

「え！？何あの速さ！？反則よ！？」

私の中に驚きと焦り、それに不安が心臓に伝わるように鼓動が早くなる。

ケイト達の事が心配だが、今此処で村へ潜入できなければ全てが無駄になる。

私の頭に迷いが生じる。

ケイト達の所へ戻るべきかどうか。

私は目をつぶって自分に言い聞かせた。

「私はケイトを信じるって！信じるって決めたんだから！

捕まるわけないんだから！レンを守るって言ったんだから！」

私は一人岩場で叫んだ。

そして車に乗った兵士達の死角に入った瞬間私は全力で村へ向けて走り出した。

レンとケイトはリコのいる岩場から大分離れた後方でゆっくり円を

書くように歩いていた。

そしてケイトは村の一部で土埃が舞うのを確認した。

「レン！一気にリコから離れて左後方へ全力で走るぞ！ついてこい！」

レンの背中を押すように声をかけケイトは先頭を走る。

ケイトは背後を気にしながら馬を走らせる。

それとは裏腹に後方にでる土埃がケイト達に向かって異常な速度で近づいて来ていた。

「何だ！？凄く早いぞ！？」

ケイトは必死に馬を走らせるがこれ以上速くはならない。

不安が伝染したようにレンも不安な表情をしている。

ケイトの中でリコの言葉が蘇る。

”不安にならないで”

「レン！心配するな！リコと約束したんだ！絶対守るってな！

俺から離れるなよ！」

ケイトは大きな声で叫んだ。

レンに言ったのか自分に言い聞かせたのかわからないけれど、

大きな声を出した事でケイトから不安が消え去った。

ケイトが後方確認しつつレンを見ると、

不安よりもケイトを信じて付いて行く意思が感じられた。

「行くぞレン！このまま突っ走るぜ！」

広い荒原にケイトの声が響き渡った。

ギルダは10名程の兵士を連れて荒野を歩いている。

二十台前半と思しき男性がギルダに横から声をかけた。

「ギルダさんまた何やらかしたんですか？」

「一体何の話だ？」

ギルダは横に並ぶ男性に目を向けながら淡々と応える。

「いや、ほら、ギルダさん毎回フィレーネ隊長に怒られた後飛び出して行くじゃないですか？

今回も突然部隊を召集して飛び出してきたわけで」

横に並ぶ男性の言葉にギルダは空を見上げて少し考えた。

「セルベルト、俺は別に怒られたわけじゃない。

急に仕事が舞い込んだんだ。我がまま隊長の命令でな。

まあ、仕事ができる奴には仕事が回ってくるものなのさ。覚えておけよ」

ギルダはセルベルトに教えるような口調で言った。

ギルダの偉そうに語る様子を見て、セルベルトは肩を落とした後追求を諦めた。

気持ちを切り替えるようにセルベルトは横に並ぶギルダに質問する。

「ギルダさん、今回はどんな仕事なんですか？」

ギルダも気持ちを切り替えてセルベルトに説明する。

「うむ、さつき兵士が数名走って行った岩場があつただろ？

その調査だ。俺はフィレーネに必要ない！って言ったんだぜ？」

「はいはい、言っていないんですね。わかりました。

まあ早く調べて終わらせましょう」

ギルダの言葉を淡々と流すセルベルトだった。

突然ギルダは馬を止めてセルベルトに手を伸ばす。

「セルベルト、双眼鏡貸せ」

セルベルトも馬を止める。

「一体何です？急に」

「いいから貸せって」

セルベルトは自分の肩に背負うショルダーバッグから双眼鏡を取り出すと、

ギルダがそれを横から掠め取った。

「ギルダさん一体何なんですか?!」

セルベルトは双眼鏡を覗くギルダに不満の声をあげる。

しかしギルダの真面目な言葉に消された。

「セルベルトそっちの仕事はお前に任せる。

俺は野暮用ができた。

後は頼んだぞ！」

そう言つと馬を走らせた。

啞然とするセルベルト達。

ギルダは50メートル程進んだ後で振り返つて付け加えた。

「そっちの仕事しつかりできなかつたらお前等減給だからな！覚悟しとけよ！」

セルベルト達はギルダの言つた内容に対して啞然とするしかなかった。

そしてセルベルトは肩を落とし、額に手を置き呟く。

「ほんといつも・・・突然居なくなる・・・。」

何である人の部下になつたんだろつ・・・」

啞然とするセルベルト達を置いてギルダはどんどん遠くへ馬で駆けて行く。

私は見張りの兵士がいない隙について外郭まで走る事ができた。

しかし全力で走つた為呼吸が荒い。

ふと目に留まつた落ちていた木の棒を拾いあげる。

（刃物は使いたくないし、これでいいよね）

崩れかけた外郭の部分から村へ侵入し、村の内部の様子を探る。

村は1・3メートル程の石垣で囲まれ、大通りもあり見通しは良かった。

（思ったより大きい村ね・・・早く村人を見つけなくちゃ・・・）  
木の棒片手に足を忍ばせ外郭に沿うように進む。

一軒ずつ確認していくが、その一方で内心焦っていた。

これだけの家を確認するだけの時間が残されていない事に、慎重性と迅速性が私の中でぶつかり合っていた。

（もうあれをやるしかない・・・）

胸の鼓動が高鳴るのを感じる。

そして呼吸が乱れる。

背中に冷たい汗が流れていた。

（もうやるわ！やらなきゃ・・・やるしかないのよ！）

私は民家の裏側で大きな声で叫ぶ。

「侵入者がたわ！逃亡者も出たわ！」

声を発した瞬間にすぐに走って移動する。

兵士に見つからないように民家の間をすり抜け、そしてまた叫ぶ。

「侵入者がいたわ！逃亡者は大通りにでたわ！」

私は更に走る。

鼓動がとても早い。

民家の隅から大通りを観察する。

兵士がぞろぞろと、沢山ある民家から出てくる。

兵士が出てくる扉をとにかく目を凝らして見る。

（見つけた！）

一際大きな家に押し込められた大人や子供が目に入った。

村人が捕まっている家を目指して外郭伝いに素早く移動する。

しかし家の入り口扉前には兵士が二人。

私は横から足音を抑えて突っ込む。

一人目の頭を兜ごと棒で殴り、上段蹴りで二人目の兜を蹴り飛ばす。体勢を整え、二人の兵士が動かない事を確認すると共に周りを確認する。

（よし！他の兵士は此処に気付いてない！）

私は捕まっている民家の扉を開け、無我夢中で倒れている兵士二人を中に引きずりこむ。

もう私の心臓ははち切れそうな程鼓動している。

考えるよりも先に体が動く。  
そんな状態で家の中にいる村人と目が合う。  
突然の侵入者に村人は目を丸くしていた。

私も声がうまくでない。

でも体だけは勝手に動きこの家全体にシールド魔法をかける。  
その瞬間私達のいる家に向けて多重発砲された。  
発砲音に驚き村人は頭を下げてその場にしゃがみこむ。  
間一髪シールド魔法が間に合ったが胸の鼓動は鳴り止まない。

しばらくすると発砲が鳴り止み外が静かになった。

私は聴覚を研ぎ澄まし、扉から覗くように外の様子を伺う。

大通りに面した広場に一人佇む少年。

少年は白い布地で胸に金の鳥が刺繍された服を着ていた。  
その周りでは金の鎧を着た兵士が十名程倒れている。

私はその光景に目を奪われた。

そして少年は口を開く。

「本当に仕えない兵士ですね。これで少し落ち着きました」

少年は顔を上げ笑顔で私の目と目を合わせた。

「後一人ですね」

少年の言葉、不気味な笑顔、そして笑顔の奥に覗かせる冷たい目が  
私の不安を煽る。

それを物語るかの様に部屋にいた数名の村人は体を小刻みに震わせ  
ていた。

レアラが岩陰で目を覚ますと、リンに加え見知らぬ女性が近くに立

っていた。

「此処は・・・」

レアラはねぼけ眼をこすりながら体を起し周囲を確認する。それに気付くとフィレーネはレアラの傍へ歩み寄り腰を落とした。

「レアラ皇女お気づきですか？」

いきなり見知らぬ女性に声をかけられ、レアラはフィレーネを警戒する様にじっと見つめる。

「申し送れました。私はフィレーネ。ガジェットと言う町で聖騎士団に所属しております。」

フィレーネは笑顔でレアラに自己紹介をする。

レアラは状況が読めず困惑した表情をみせた。

そしてふと気付く。リコとケイトとレンが見当たらない事に。

レアラはフィレーネを他所に、慌てた様子でふらつきながらも立ち上がる。

そして辺りを再度見渡す。

レアラの表情から不安が滲み出る。

「リコ！ケイト！レン！」

レアラはか細い声で叫ぶ。

レアラの思いとは裏腹に返ってくる言葉は無い。

横で倒れているリンを見つけ揺さぶるが、全く起きる気配がなかった。

フィレーネは切迫したレアラの表情から大切な人を探していると推測できた。

レアラに近づき声をかける。

「誰かを探しているんですか？」

フィレーネの掛け声に反応しないレアラは不安な表情で一人悩みこむ。

「皆何処行つたのじゃ・・・」

レアラは辛そうな表情で拳を強く握った。

ケイトとレンは後方から追ってくる金の鎧を着た集団から逃げた。

距離はまだ開いているものの確実に詰められる速度にケイトは内心あせっていた。

「レン、此処ら辺に食料を備蓄する為の穴か何かないか？」

ケイトは併走するレンに聞く。

「あります。この先にいくつか。どうしてですか？」

「その穴へレンは入ってくれ。俺が敵を引き付ける」

「でも……」

「俺達は捕まるわけにはいかない。」

絶対無事にリコの元へ戻るんだからな」

ケイトの堅く強い意志はレンを渋々納得させた。

「わ……わかりました。」

ケイトさん絶対に無事に逃げてください！」

「当たり前だ。」

レンの不安げな表情とは裏腹にケイトは笑って応えた。

ケイト達は食料備蓄用の穴に最も近い巨岩に一度身を潜めた。

「レン、ある程度時間が過ぎたら馬に乗ってレアラ達がいる場所に戻ってきてくれ」

ケイトの指示に対してレンは表情を落としていた。

ケイトはレンの頭の上に一度手を置くと、真剣な眼差しで走り去る方向を見た。

そんなケイトにレンは顔を上げて一言言った。

「ご無事で……」

「おつよー！」

ケイトは馬にムチ打つと巨岩の影から出て行った。  
残されたレンは走り去るケイトの背中を、心配そうな目つきで見えなくなるまで見つめた。

ケイトは馬上で今後の予想展開を見据えていた。

「敵の注意を引くのは良いとして・・・どうやって振り切るう・・・」  
ケイトは今更ながら良く考えていない事に気付く。

すると何処からか女性の声が微かに聞こえた。

「はぎゅうう！はにゃ！？」

ケイトは周囲を見渡すが声の主は見当たらない。

「うゝんまあいいか。それにこんな事してる場合じゃないしな」  
ふとりコの馬セリスに鞆が括りつけられている事に気付く。

ケイトが鞆の中を漁ると、青白く光る小さな妖精が目を回し横たわっていた。

妖精は先日見た妖精よりも更に小ぶりで親指2本分程度の大きさしかなかった。

髪は後ろで一つに束ね、整った顔立ちの青い妖精という感じだった。  
ケイトは妖精を手で掬い上げ声をかけた。

「おい、大丈夫か？」

妖精は横たわったまま反応がない。

妖精をきにしていると、

突然背後から発砲音があり妖精どころではなくなった。

背後を見ると距離はまだあるものの車2台が確実にケイトを追ってきていた。

「狭いけど此処に入ってきてくれよ」

そう言う胸ポケットに衝撃がなるべく無いように入れた。

「って言うかそれ処じゃないな、何か鞆に無いか・・・役に立ちそうな物・・・武器とかあれば・・・」

ケイトが鞆を漁ると剣の刃がない柄だけがあった。

「なんだこれ?!」

「それは魔剣セルシアスですよ!？」

気がついたのか胸ポケットから妖精が顔を出していた。

「魔剣セルシアス?」

妖精の言葉にケイトはじつくり柄を見た。

「いや・・・魔剣って言ったって刃がないぞ?」

「えっとですね、その魔剣は近くに水がないと使い物にならないです」

「意味ないじゃん!」

真面目に応える妖精に呆れた顔を向ける。

「俺は今使える武器を探してるんだ。後ろ見てみ?追っ手に捕まると殺されるかもしれないんだ」

ケイトの声に妖精は羽で飛びケイトの肩に乗った。

「え!?なんか棒みたいなのこっちに向けてますよ!？」

「だからさつきから言ってるだろ。追われてるって」

驚きの表情でケイトの肩を叩く妖精。

そんな妖精をほっておいて次なる手段を考えるケイト。

妖精はふと気付いたようにケイトに話しかける。

「ところで貴方誰ですか?私は妖精のルーリと申します」

妖精は肩の上でお辞儀をした。

それに対してケイトも自己紹介をする。

「俺はケイト。リコの・・・将来結婚・・・」

「え!?結婚!?リコ様の旦那様であられますか!？」

ご無礼を申し訳ございません!」

ケイトのまた誤解を招きそうな言葉がルーリを困惑させた。

ルーリは自分の立場を弁えると、打って変ってケイトの肩の上で膝を突いた。

「ケイト様ご提案が御座います。」

先ほどの魔剣、リコ様の旦那様であられるケイト様なら扱えるかもしれません!」

真剣に言うルーリにケイトは真面目に問い詰める。

「どう言う事だ？さっきは水がないと使えないって言ったる？」

「はい。ですが私は水の妖精。私が力をお貸し致します」

ケイトはルーリの協力で武器を手に入れる事はできた。

だが、それとは別の問題があった。

「だが、扱って言ったって俺全くわからないぞ？」

「私もわかりません。魔剣セルシアスを扱えた人は本人セルシアスだけだったと聞いてますから。」

今はやってみるしか他に方法が御座いません！」

ルーリの言う事は確かにもっともな答えだった。

ケイトは柄をじっと見つめ心配ながらも決心を固めた。

ケイトを追う一台の車に、二十歳前半程で長髪の男が目を瞑り考え込むようにして座っていた。

その横に座る兵士が気にかかる様に長髪の男に話しかける。

「ガーネス小隊長どうされましたか？」

横に座る兵士の言葉を受けた後ゆっくりとガーネスは目を開ける。

「いやな、そろそろだと思ってるな」

「一体何の話です？」

横に座る兵士の質問には答えずガーネスは立ち上がり外周を見渡す。

ガーネスは併走する車にも聞こえるように声を張り上げた。

「全員止まれ！」

ガーネスの急な物言いに2台の車は急停車する。

兵士9人は突然の出来事に驚きながら大声を出したガーネスに注目する。

「いいか、良く聞け！俺達は今から別行動を取る！」

これはルーフェンス將軍の命令だ！わかったか！？」

ガーネスの突然の言葉に兵士は動揺を隠せない。

一人の兵士が声を発した。

「ガーネス小隊長、それでは我々の任務はどうなるのでしょうか？」

ガーネスは良い質問とばかりに口元に笑みを作りながら応える。

「我々はこの地に眠る円卓の魔剣を探す！」

兵士の間でざわめき立った。

「お前等返事は！？」

ガーネスの厳しい声に兵士達は大きな返事をすぐに返した。

ガーネスが乗る車の運転手が声をあげる。

「前方で逃げている捕虜はどうしましょう？」

「あれは捕獲しろ。原住民は情報持っているからな」

運転手は返事をし運転を再開する。

ガーネスはこの日を待っていたとばかりに笑みを零していた。

ケイトはついに追跡してきた兵士達に追いつかれ車が前後へと停車する。

それと同時に剣をもった兵士がケイトを取り囲むように散らばった。馬上からケイトは困惑しながらも周りをぐるりと見渡す。

そんなケイトにガーネスが車内から立ちあがり声をかける。

「おい、小僧。もう逃げ場はない。諦めて捕まれ」

車から降りたガーネスは余裕顔でゆっくりとケイトに歩み寄る。

ケイトはセリスを気遣い馬から降り少し距離を取った。

そしてガーネスと対峙する。

「お前達は一体何者だ！？村人達をどうするつもりだ！？」

ケイトの質問にガーネスは興味なさそうに応える。

「良い質問だ。だが、応える義理はない」

二人の間に僅かな沈黙が流れる。

だがその沈黙をガーネスが先に破った。

「おい、お前の肩にいるの・・・まさか妖精か!？」

ケイトは肩にのるルーリをちらりと見て応えた。

「それがどうした？」

「こつちの世界には妖精がまだいるのか・・・ほんとこの世界は楽しませてくれる！」

ガーネスは奇妙な笑みを零した。

その後でガーネスは真っ直ぐケイトを見据えて言った。

「妖精をこつちによこせ」

「いやだね。お前らに渡すものは何も無い！」

「なら力づくでやるしかないよな!？」

そう言うとガーネスは抜剣した。

ガーネスの持つ剣は燃える様に赤く、ドロドロと溶け出す様に剣から赤い雫が垂れていた。

その剣を見てルーリは目を見開き、ケイトの耳元で囁いた。

「ケイト様!あれも魔剣ですよ！」

「え!?魔剣ってそんな沢山あるのか!？」

「いえ、真の魔剣は12本しかないんです。

ただ真の魔剣に似せた魔剣があるのも事実で、あの剣の性能は未知数です」

ルーリの説明を聞いたがケイトは目の前の状況に手一杯だった。

ケイトはゆっくりと背中に帯剣していた魔剣(柄のみ)を取り出し両手で握った。

ガーネスはそれを見て啞然とした。

「なんだその剣は・・・刃が無いとかなめてるのか?!」

「いや・・・本気だぜ・・・」

ケイトは自信無さそうに言葉を返した後肩の上にいるルーリに囁いた。

「なあ、俺死んだらどうしよう。リコと結婚できねえよ」

「そうですね。死んだら死んだ時に考えましよう・・・。私もその時

はお供致します・・・」  
ルーリは既に涙目だった。

ガーネスは正面切つて魔剣を振り下ろしてきた。  
ルーリはその瞬間に何処かへ消え、  
ケイトの魔剣に青白く透き通る様な刃ができる。  
ガーネスの剣を止めるべくケイトも魔剣を横に凧ぐ。  
しかしケイトの魔剣と接触する前にガーネスの魔剣は、青白いシールドに阻まれ激しくスパークする。  
シールドが張られていた事を知っていたかのようにガーネスは力で押しこめる。

ケイトはその一瞬を逃すまいと魔剣でガーネスの腹を横に凧ぐ。  
だがケイトの魔剣はガーネスの着る鎧に当たり簡単に砕け散った。  
啞然とするケイト。

ガーネスは口元に笑みを浮かべた後ケイトのシールドを突き破り、  
魔剣はケイトの左肩から腹部までを切り裂いた。

ケイトは後方へ吹き飛び倒れこむ。  
ルーリも同時に姿を現しケイトの肩辺りで倒れこむ。

ガーネスは胸から大量出血して倒れているケイトを見下す。

「魔剣の使い方を分かっちゃいないな。素人が！」  
倒れているケイトから、落ちている魔剣と妖精に目を移す。

「妖精は高く売れるな。そしてこの魔剣興味深い。  
12種の一つの可能性もあるからな。」

そう言い魔剣を拾い上げようとした瞬間、誰かが高速でガーネスに向かつて走って来た。

周りで囲んでいた兵士達は全く気付いていない。

ギルダの剣とガーネスの魔剣が激しくぶつかり合う。

ギルダの重い攻撃に耐え切れずガーネスは体勢を崩す。

その瞬間をギルダは見逃さない。

気付けばガーネスは背後を取られ、ギルダが背中を押さえ込むように乗っかっていた。

ガーネスは苦しそうに声をあげる。

「貴様・・・何者だ！」

「何者って言われてもな・・・正義のヒーロー？」

兵士達はスパーク音でやつと異変に気付き、気付いた時には上官であるガーネスが下敷きにされていた

兵士達は各々でガーネスの名前を呼び、駆け寄ろうとする。

しかしギルダは手を前に出し、「来るな」の合図をする。

「おっと、下手に近寄らない方がいい。

俺は体中に剣を仕込んでるんで、君達とこの人に刺さるといけない。俺が言いたい事わかるよな？」

踏みとどまる兵士達にギルダは懸命な判断とばかりに頷いた。

ギルダの目先には先ほど使用した剣が溶けて落ちていた。

それを見てギルダは一人納得する。

後ろを見れば怪我で倒れているケイトとルーリ。

ギルダは腰から別の剣を抜きガーネスの首に刃を置く。

「時間がないから取引しよう。俺の実力はあるんだら分かるだろ？引いてくれ。あんまり殺したくないんだわ。いくらあんた達が嫌いでもさ」

ギルダの下敷きにされ声が出しにくいガーネスは、首に当てられた刃に気をつけながらゆっくり頷く。

「わ、わかった」

ガーネスの言葉を聞いた後、ギルダはすぐにその場を離れ倒れているケイトに歩み寄る。

ケイトの傍らにしゃがみ傷の具合を見ると、服は破れ出血はしてい

るものの致命傷だけは避けていた。

それに妖精による恩恵のせいかわが塞がり始めていた。

横で倒れている妖精は特に外傷もなく気絶しているだけだった。

小さな妖精の頬を指先で突つつくと寝言を言った。

「もう・・・たべられましえん・・・」

ギルダは呆れた様に肩を竦めた。

妖精を片手で拾い上げ自分の頭の上に置き、ケイトを横になったまま両手で抱き上げた。

そして辺りを見回し車を見つけると歩き始めた。

ギルダが歩いていく先を兵士が困惑した表情で道を開ける。

「追ってくるなよ。死ぬぞ」

淡々とギルダは言葉を残し、我が物顔で敵の所有物である車にケイトに乗せた。

その姿をガーネスは睨みつけながら立ち上がる。

ギルダは再度戻ってくると、落ちているケイトの魔剣を布で包み懐に入れた。

睨みつけるガーネスを他所にギルダはそのまま車に向かう。

ギルダは振り向かずガーネスに言う。

「魔剣はお前の様な奴は持つな。災いしか呼ばん。」

そう言うのとギルダは呆然と立ち尽くす一人の兵士を呼び車の扱い方を聞いた。

そして2匹の馬を引き連れギルダ達は立ち去った。

残されたガーネスに啞然としていた数人の兵士は駆け寄った。

「ガーネス小隊長どうされますか？追いますか？」

ガーネスはギルダが立ち去った方向を睨みつけながら言う。

「車の車輪をしてみる。壊されてる。」

追いかけるのは無理だ。」

兵士達はガーネスの言葉でやっと車が故障している事に気付き啞然とする。

ガーネスは考え込んだ後魔剣を鞘に収め車に向けて歩き出した。

「今は追わなくていい。まずは車を治せ。」

ガーネスの言葉に従い動き出す兵士。

ガーネスはギルダが立ち去った方向を見つめる。

「何者だ・・・あいつ・・・この方向からしてあの村に行くようだ。」

あの村にはニアがいる。同土討ちになってくれれば万々歳だな」

そう言うとは忙しなく動く兵士達の下へ歩いていった。







信じる心×不安×妖精×魔剣（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ぼちぼちでも書いていくので応援よろしくお願いいたします！

## 思いと思い（前書き）

こんにちわ！ラミレシアです！更新また遅くなりました！  
リコはどうなる！そしてケイト達は！？  
では本文スタート

## 思いと思い

私は目の前で村人達が抱き合い震えている光景に目を奪われていた。  
（確かにあの少年は不気味。でもこの村人達の怯え方は尋常じゃないわ。）

何があつたつていうの……  
考えていても埒が明かないと判断した私はもう一度扉から周囲を確認する。

（見たところあの少年だけだわ……。今しか村人を逃がす好機はない！）

懐からナイフを取り出すがまた懐に戻した。

（大丈夫。素手でなんとかしてみせる）

私は呼吸を整えると一気に扉から飛び出す。

すぐに周囲を確認するが不気味な少年以外誰も立っていないかった。

「倒れている兵士をやったのは貴方？」

私の質問に少年は何も応えない。

むしろ私が出てきた事で口元に笑みを零した。

（何コイツ……）

私は眉をひそめ警戒心を更に強めた。

しかし次の瞬間何が起きたのかわからなかった。

気付けば目の前に少年がいて、私の腹部に拳が当たっていた。

驚く間もなく私は後方へ吹き飛ばされる。

民家の壁に叩きつけられ気絶寸前だった。

私の頭の中は混乱する。

今の一瞬に何が起きたのか理解できない程に。

そんな私にゆっくりと少年は近づいてくる。

「ギリギリで致命傷は避けたね。立派だよ。」

そこら辺に倒れている兵士なんか即死だったよ？」

私の前までくるとしやがみこみ目線を合わせてくる。

この時恐怖を植えつけられた私が出た。

体が無意識に震える。

そんな自分を認めたくなくて少年を睨みつける。

少年は笑顔で話しかけてくる。

「睨みつけても無駄だよ。もうじき君は僕に殺される。

死ぬのが怖いかい？ そうだよ。誰しも死ぬのは怖い。

でもね、弱い者は死に強いものは生き残る。

これが自然の摂理つてもんだよ。」

そう言うと私の胸倉を掴み持ち上げる。

「君の目が僕は気に食わない。自然の摂理に逆らおうとするその目が！」

少年は急に怒鳴り私を大通りへゴミのように投げ捨てた。

辛うじて受身を取ったがそれでも強打は免れなかった。

「君達は平和な世界にいるんだね。僕達の世界とは大違いだ。

だから、余計に腹が立つ。腹が立って腹が立ってしょうがないよ」

少年は辛うじて顔をあげる私に笑顔を向けて歩いてくる。

少年の奥底に何があるのか今の私には分からない。

しかし私も此処で死ぬわけにもいかない。

私は少年を見つめながら全身の激痛を懸命に堪え立ち上がる。

少年は私に歩み寄りながら腰に刺してあつた鞘から剣を引き抜く。

その剣は異様な形をしていた。

刃の至るところに無数の穴が空き、刃自体が緑色に染まっている。

私はその剣を見た瞬間危険な感じがした。

すぐに後方に飛ばうとするが右腕を少年の左手に掴まれた。

少年の顔を咄嗟に見るととても楽しそうに笑った。

戦いを楽しむように。

「反応はとても良い。けど君は逃げる事も僕を倒す事もできない。そして死ぬしかない」  
左手で即座にナイフを取り出そうとするが少年の右膝で蹴られ弾かれる。  
私の体は完全に無防備状態になった。  
少年が持つ剣が私の胸の上に振ってくる。  
右腕は封じられ左手は動かない状態で、降り注ぐ剣の先を見つめるしかなかった。

ルーリは気が付くと柔らかい布団の様な物の上に横たわっていた。  
「はわ?! 此処は・・・」

ルーリは上半身を起し周囲を見渡す。  
横にはケイトが横たわっており、良く見ると追っ手が使用していた乗り物の上にあった。

前を見れば見知らぬ男性が車を操縦している。

ルーリは一通り慌てた後ケイトを揺すりながら耳元で呼びかける。

「ケイト様! ケイト様! 起きてください!」

ケイトは一向に目を覚ます様子が無い。

ケイトの上に乗っかると上半身を包帯で巻かれ、血が滲み出していた。  
ルーリは息を呑んだ。

そんな時前方から声が飛んできた。

「妖精さんよ、少し寝かせといてやんな。傷口がまた開くと死ぬぜ?」

ルーリはケイトから前方にいるギルダに目を向けた。

「貴方様は・・・ど・・・どなたでしょうか? 私達を何処へ連れていくのでしょうか?」

ルーリは見知らぬ男性に動揺しながらも質問する。  
そんなルーリに対してギルダは淡々と応える。

「俺はギルダだ。行き先はこの近くに仲間がいるんでそこへ向かってる。」

「譲ちゃんの名前は？」

「私はルーリです」

ルーリは警戒しながらも自己紹介をした。

しばらくギルダと名乗る男性の背中をじっと見てみるとケイトが身じろぎした。

ルーリはギルダからケイトの方に視線を移す。

ケイトは苦痛で表情を歪めた後辛うじて目を開けた。

「こ・・此処は・・・」

「ケイト様！ご無事で何よりです！」

ケイトの言葉にルーリは笑顔で応えた後万歳した。

そんなルーリを他所に苦痛に耐えながらも上半身を起す。

周りを見れば自分が先ほどの追っ手が使っていた車に乗車している事に驚いた。

前を向けば見知らぬ男性が目につき、

腹部を触れば包帯が巻かれ処置がされていた。

ケイトは再度ギルダを見やった。

「これはあんたが？」

「ん？まあな。下手糞だが勘弁してくれ。」

「いや・・助けてくれてありがとう・・でいいんだよね？」

ケイトの質問にギルダは大きな声で笑った。

「そうだな。俺はギルダだ。聖騎士団の一人と言えばわかるか？」

ケイトは心底驚いた。

「え！？聖騎士団ってあの聖騎士団！？」

大声を出しすぎて腹部が痛み咳き込んだ。

そんなケイトに淡々と応える。

「あの聖騎士団って、聖騎士団は一つしかないぞ」

ギルダの言葉にケイトは呼吸を整えて再度質問する。

「でも何でこんな所に聖騎士団が？」

「まあ、ちとわけありだな。ところで傷の具合はどうだ？  
大分出血していたが。」

「このまま安静にしていれば回復すると思います。ありがとうございます。」

それと俺はケイトって言います。遅くなってすみません」

ケイトはギルダと一通り話を終えると隣で心配顔で見つめるルーリに目をやった。

その瞬間ケイトは何かを思い出したように大声をだした。

「あ！こんな事してる場合じゃない！リコの所へ戻らなければ！」  
リコの名前にルーリは過剰に反応した。

「え！？リコ様！？そうです！そうです！リコ様の所へ戻りましょう！」

ルーリは羽で飛びながら右往左往し始めた。

ケイトは血相を変えてギルダに詰め寄る。

「ギルダさんすみません！俺たち行かなければいけない所があるので此処で止めてくれませんか！？」

ギルダは慌てるケイトを他所に冷静に聞き返す。

「お前ら、その怪我で何処行くつもりだ？寝言ほざくなよ？」

「いえ、本気です。リコが・・・俺達の仲間が待つてるんです！」

今にも此処から飛び出していきそうなケイトを見てギルダは少し考えた。

「わあつた。わあつた！送って行ってやるから何処行くんだ？」

ケイトは安堵した後すぐに応える。

「ネバルゲ村です。わかりますか？」

「ネバルゲ村には今向かってる。だが、中には入れないぞ？」

「どうしてですか？」

「ネバルゲ村は見知らぬ軍によって制圧されてる。」

今俺達の部隊が様子を見ているが今は無理だ」

ギルダの言葉にケイトは難しい顔して押し黙った。

そんなケイトをルーリは不安げに見つめる。

突然ケイトは真剣な表情で言葉を発した。

「では村の近くで止めてください。一人でいきます」

その言葉にギルダは呆れた風に言い返す。

「お前はバカか？さっき言ったる。見知らぬ軍に制圧されてるって。今行ったら間違いなく死ぬぞ？」

「それでも行きます。リコが待ってます。」

ケイトの真剣な眼差しをじっと見るとギルダは溜息をついた。

「世の中のバカは俺一人だけで良いんだがな。」

わかったよ。どんだけ大事な奴がいるのか知らんが俺も付き合ってる。」

ギルダは運転しながら笑った。

「ギルダさんは関係ありませんよ？」

「関係大有りだ。お前を見捨てて行けなくなった。それじゃ理由にならんか？」

ギルダの真剣な表情にケイトは喉を詰まらせた。

「ありがとうございます！」

ケイトの言葉にギルダは前を見ながら片手をあげる。

いつの間にか立ち上がっていたケイトは座りなおし、じっと自分を見つめるルーリを見る。

「お前も行くか？」

「あつたりまえです！私はリコ様の妖精です！リコ様に会わずに死ぬますか！」

ルーリは格好つけているのかわからないが、空中でパンチを繰り出していた。

そんなルーリの頭をケイトが微笑みながら軽く触った。

## 思いと思い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

更新スパンを出来る限り短くして行こうと思います。

文章自体は少ないかもしれませんが、

少しでも早くお披露目したいです。

では8章であいましょう

## 突撃！（前書き）

こんにちわ！ラミレシアです！

さてとネバルゲ村編も大詰めになってきました！

さてどうなる！

では本編スタート！

突撃！

レンはケイトと分かれた後地下蔵に隠れた。

そして金の鎧を着た人達がケイトを追って行った後、リン達と合流すべく馬に跨り駆け出していた。

リン達と別れた巨岩の近くに来ると、見知らぬ人達が大勢あちこちに座っている。

レンは慌てて近くの岩陰に隠れ様子を見た。

「一体この人達は・・・リンとレアラさんは・・・」

リンとレアラは大勢の人達が散らばる中心にいた。

「一体どうなってるの・・・」

レンは一人遠く離れた傍でリンとレアラの様子を見守るしかなかった。

ギルダ達はネバルゲ村の付近にまで来ると一旦車を止め、後続していた馬2匹を村近くの岩陰で待機させた。

ケイトとルーリはセリスの頭を撫でながら感謝の言葉を述べた。

その後でギルダは運転を再開し風を切る車内で声をあげる。

「ケイトとルーリ！もう間もなく村に着くぞ！準備しておけ！」

ケイトは腹部の傷を包帯の上から撫でた後覚悟を決めた表情になった。

「もう準備できてますー！！」

ケイトは透き通る様な刃の魔剣を鞘に収め懐にしまう。

ルーリも返事をする。

「はい！準備できてます！はい！」

緊張しているのかルーリは言葉が変だった。

レアラは眠るリンを寂しげな表情でじっと見つめていた。周囲ではファイレーネが男性から報告を受けている。

「村に動きがありました！何か騒ぎがあつた模様です！ですが民家が多く此処からでは確認できません！」

ファイレーネは報告を受けた後考え込んだ。しかしすぐに別の女性がファイレーネに走り寄る。

「申し上げます！村に向かう車あり！車にはギルダさんが乗ってます！」

ファイレーネは目を見開いた。

「はあ！？どう言う事だ！？」

「いえ、私にもわかりません。ただ村に直行しているのです。もう間もなく肉眼で確認できます」

「あのバカ・・・また勝手な行動して！」

ファイレーネは怒声をあげた。

周囲の騒がしさにレアラは気付き、辺りを見渡す。すると遠くで土煙が上がっていた。

レアラも何事かと思いい目を細めて見る。

するとそこにはケイトらしき人物が目視できた。

「ケイト！？」

レアラは驚きの声をあげる。

周りにいた大人がレアラの大きな声に驚いた。

レアラは近くに置いてあつた双眼鏡を借り土煙があがる場所を見る。

「やっぱりケイトじゃ・・・何で村に・・・リコはいない・・・」

レアラは村には行きたくなかった。

しかしケイト達に置いて行かれたくもなかった。

悩んだ末レアラは走り出し無我夢中で空いてる馬を探した。

空いてる馬を見つけ飛び乗る。  
突然の乗馬に馬は驚くがレアラは綱をうまく操り落ち着かせた。  
そしてケイトが乗る車を追いかけるべく走り出す。

フィレーネはギルダが乗った車を観察するのに夢中で気付くのが遅かった。

「フィレーネ隊長！レアラ様が馬に乗ってギルダさんを追っていました！」

「はあ！？」

女性の報告に驚きの声をあげるフィレーネ。

「うう・・・モー！全部隊に通達！村に突撃よ！それとすぐにソフィアを呼んで！」

フィレーネは強い口調で命令すると報告に来た女性は返事をして逃げる様に走って行った。

「モー何なの！ギルダア！毎回毎回！」

フィレーネはすぐに出撃の為準備をした。

ギルダは後ろ斜め右方向から馬が近づいて来るのに気がつく。

「何か追手が来てるな」

ギルダの声でケイトも後方を見る。

「レアラ！？」

ケイトは驚きの声をあげる。

見ればレアラは必死に馬を操りケイトに追いつこうとしていた。

「ケイト！！」

ケイトは後ろから叫ぶレアラを見た後でギルダのほうを見る。

「ギルダさん止めて！レアラは仲間なんです！」

ケイトの必死な掛け声にも関わらずギルダは前を向き運転しながら淡々と応える。

「それはちょっと難しい相談だな。レアラとやらの後方を見てみ。もっと凄いのが追いかけて来てる」

ケイトはすぐに後方に目を向けた。

すると砂煙で良く見えないが大群が迫ってきていた。

「え！？ギルダさん！？あれは一体何ですか！」

「まあ、そういう事だから。止まれない」

ギルダの返答を聞いてもレアラをこのままにはしておけないケイトは考える。

後方ではレアラの乗った馬の速度が段々落ちてきていた。

ケイトは急にレアラから視線を外しギルダの方へ向き直った。

そして懐から魔剣を取り出しギルダの首筋へ持つてくる。

「お願いします。速度を落としてください」

ギルダは横目でケイトを見る。

ケイトの目は本気だった。

「わかったよ。まったく無茶しやがる」

「ごめんなさい」

ケイトは申し訳なさそうな表情をギルダに向ける。

速度が徐々に落ちレアラはケイトがいる車と横に並んだ。

それを確認するとケイトはレアラを馬から抱き上げ車に引き上げた。

レアラが乗っていた馬は離脱し離れていく。

「お前無茶するな。困った奴だ」

ケイトの言葉にレアラは少し涙ぐんでいた。

「だって、起きたらリンしかおらんし・・・リコもおらんし・・・」

「悪かった。もう泣くな」

ケイトはレアラの頭を撫でた。

そこへギルダが声をかける。

「感動の再会中悪いんだが、そろそろ村へ突入するぞ」

前を見ると村の正面入り口には金の鎧を着た兵士が2人立っていた。

それを見てレアラは表情を強張らせ体を震わせる。

今から見たくないものを見ないといけないような表情で。



## 突撃！（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

ネバルゲ村編のクライマックス近いですね！

さて次回9章であいましょう！w

**暴走！！！！（前書き）**

ラミレシアですこんにちわ！w

3日連続アップに成功しました！w

少しですがアップします！では本編スタート！  
リコ！ケイト！レアラ！どうなっちゃうの！？

暴走！！！！

金の鎧を着た兵士達は、自分達の車に見知らぬ人物が乗っている事を確認すると驚きの声をあげた。

「おい！俺たちの仲間に乗ってないぞ！？しかも突っ込んでくる！」

「此処は通すわけにはいかんだろ！ニア隊長に殺されるぞ?!」

兵士達は一斉に棒筒をケイト達が乗る車に向け発砲してきた。

ギルダがそれに応じて声をあげる。

「頭を下げる！このまま門を突き破る！衝撃に備えろ！」

ギルダの声と共にケイトはレアラの頭を抑え一緒に体ごとしゃがみこむ。

ルーリはケイトの肩に目を瞑りながらしがみつく。

それから間もなく大きな衝撃と共に木の門を突き破った。

見張りの兵士も木の破片が飛び交った為その場に伏せる。

ギルダは動きが鈍り操作が難しくなった車をなんとか操る。

そしてそのまま大通りを抜けていく。

村の中心部にある広場に着くとギルダは車を止めた。

所々に倒れている兵士達とリコを片腕で抱き留めた少年が立っている。

リコの口からは血が垂れ眠ったように動かない。

そして少年の持つ剣からは血が垂れていた。

目の前の光景にケイトとレアラそれにルーリは息を呑む。

少年はリコを抱き留めながら広場への珍客に目を向ける。

リコを地面にゆっくりと下ろし立ち上がると深い溜息をついた。

「門番すらできないのか・・・やっぱり僕だけでよかったかな」

独り事を言う少年。

この瞬間ケイトは周りが見えなくなった。  
目の前の光景だけが全てと言わんばかりにリコと少年を凝視する。  
ケイトは知らず知らずのうちに呼吸が荒くなっていた。  
レアラも目の前に立つ少年とリコを凝視していたが隣に立つケイトの異変に気付く。

それと同時にケイトの肩に乗っていた妖精にも異変がおきていた。  
ケイトに声をかけようと手を伸ばした瞬間レアラは車から弾き飛ばされた。

地面に落下する寸前でギルダに受け止められる。

「譲ちゃん大丈夫か？」

突然見知らぬ人に声をかけられ動揺するレアラ。

「え、あ・・うん」

レアラは動揺しつつもケイトから目が離せなかった。

「妖精が・・ケイトと共鳴してる・・」

レアラの言葉にギルダは耳を傾ける。

「どう言う事だ？」

「妖精がとても怒ってるの。原因はおそらくリコ・」

妖精の怒りとケイトの怒りが共鳴し理性を失いかけてる・・」

ギルダとレアラはどうしていいのかわからず呼吸を荒くするケイトを見つめた。

ケイトは負の感情を抑えた声を出す。

「リコに何をした・・糞ガキ・」

ケイトの右手には何時の間にか魔剣セルシアスが収まっていた。

刃は青白く輝いている。

ケイトの体には何種類もの光が折り合わさっていく。

その光景にレアラとギルダは釘付けにされる。

その時レアラは思い出すように声を出す。

「とても危険・・ケイトが死んでしまう・」

少年もケイトの異変に目を見開く。

「へー。ほんとにいるんだ。精霊と妖精の両方から加護を受ける人間。」

珍しい者を見ちゃったな」

ケイトを見つめる傍ら、広場の片隅でレアラを発見し驚く。

「レアラ皇女……」

少年の言葉と視線に気付きレアラも目を向ける。

「ニア……」

ニアとレアラは目を合わせると気まずい空気が流れた。

その後でニアの口元から笑みがこぼれた。

「レアラ皇女生きていたんだね。もう死んでしまったと思って諦めていたんだ。」

これで僕は君を殺せる」

歪んだ笑みを向けるとレアラは体をびくつかせ体を震わせた。

レアラはそれでも勇気を籠め再度ニアの方を向き叫ぶ。

「ニア逃げて！ケイトは貴方を……」

「今頃僕の心配ですか？ほんとに腐れ皇女だ。」

ニアの言葉にレアラは目を大きくさせ、辛らつな表情で視線を地面に逸らした

そんなレアラにニアは言葉を続ける。

「心配しなくて大丈夫。貴方を殺すまで死にませんよ。」

僕にはこれがあります」

ニアはそう言うのと懐から赤いペンダントを取り出した。

レアラはそれを見て驚愕する。

「お母様!？」

驚愕するレアラの傍らニアは口元に笑みを零す。

暴走!!! (後書き)

読んでいただきありがとうございます!  
では10章で会いましょう!

## ニアVSギルダ(前書き)

毎回読んでいただきありがとうございます！

10章突入です！

では本編スタート！

## ニアVSギルダ

次の瞬間ケイトの周りで竜巻が発生した。

ギルダはレアラを抱きかかえ竜巻の爆風に耐えている。

ギルダにはなんとなくだが竜巻を起しているのが異質な空気を醸し出すケイトだと察した。

「ケイト！村ごと潰す気か！？」

ギルダの言葉にケイトは何も反応しない。

村に建っている民家が軋み段々と壁が剥がれてきていた。

そしてついにケイトはニアに向けて走り出す。

ニアはケイトの魔剣を緑色した剣で真正面から受け止めた。

「く・・・これが選ばれた人の力か。」

だがいつまで体が持ちこたえられるかな」

ニアは苦痛の表情で言葉を吐き捨てる。

ケイトは完全に理性を失い牙むき出しでニアを襲う。

「がるうううう！」

ケイトの魔剣に押し飛ばされニアは空中に飛ばされる。

「パワーは人外か！？」

ニアはぼやきつつ空中から地上のケイトを見つめる。

ケイトは地上からニアに向けて魔剣を大きく薙ぐ。

魔剣から大量の水が飛び出し刃の様に鋭く形を変えニアに向かって勢い良く走っていく。

ニアは空中で身動きとれず、完全に水刃はニアを捕らえていた。

しかし、ニアは赤いペンダントを前にかざすと水刃の勢いは急激に衰えた。水になった。

民家の屋根へ着地したニアは一息ついた。

「危ない危ない。さすがにあれをまともに食らったら死ぬところだった」

水刃を跳ね除けた赤いペンダントをじっと見ると小さな罫が入って

いた。

赤いペンダントが出てからケイトの様子がおかしくなる。身動きせずじつと立ち尽くすケイト。

その一方で村に発生した竜巻は大きくなっていった。

レアラは立ち尽くすケイトの異変に気付く。

「まさか・・・お母様のペンダントのせいだ・・・」

この時レアラの中では沢山の思いと後悔が複雑に絡み始めていた。

大通りから広場に乘馬した大勢の人間が入ってきた。

その先頭に立つフィレーネは目の前の光景に唖然とするしかなかった。

「これは・・・」

息を呑む傍らレアラを抱え村の墨でしゃがんでいるギルダを見つける。

「ギルダ！お前また何かしたのか！？」

ギルダはフィレーネに声をかけられ罰が悪そうな顔をする。

「俺は何もしてないですよ！ってというか隊長達危ないですよ！？」

「バカ者！危ないからって引っ込んでいては聖騎士の名が泣くわ！

それにあれ程勝手な行動するなって言っておいたでしょうが！」

ギルダの言葉にフィレーネは怒鳴って応えた。

しかし目の前の光景がすぐに気持ちを切り替えさせる。

フィレーネはすぐに後ろで唖然としている仲間に指示を出す。

「皆！とにかく村人を見つけて！その後は最優先で助ける事！」

フィレーネの指示に聖騎士団員達は大きな声で返事をする。

予め作戦が立てられていたのか聖騎士団の人達は数名のグループに別れ散った。

ギルダとレアラは暴風の中立つたまま動かないケイトと、広場の片隅で倒れているリコを見る。

「譲ちゃんさつきから知った風な口を聞いているが、なんとかできるのか？」

ギルダは腕の中で震えるレアラに声をかける。

しかしレアラはじっとしたまま動かない。

その時ニアは立ち尽くすケイトに向かって剣を持って走る。

ギルダは即座に走り出しニアの前に立ちはだかった。

「何するんですか？早くその少年を殺さなければこの村ごと滅びますよ？」

「この事態を引き起こしたのはお前だ。ケイトに罪はねえよ」

平然と話すニアに対してギルダは怒りの矛先を向ける。

ギルダは腰の剣を抜きニアと対峙する。

先にニアが動いた。

ニアの素早い斬撃をギルダは剣で悉く受け止めた。

隙についてギルダはニアの左脇腹に蹴りを入れる。

ニアは後方へ吹き飛ばされるが一回転して着地した。

「お前の剣も魔剣か。今は魔剣が流行ってるのかね？」

「たたく。これじゃ俺の剣が使い物にならなくなるぜ」

ギルダは自分の剣が既に刃こぼれしているのを見ながらぼやく。

そんなギルダにニアも余裕の表情で応える。

「貴方にも魔剣を差し上げますよ。僕の仲間になってくれたらですけど」

ギルダは呆れた顔で頭を左右に振った。

「魔剣一本とは・・・俺も安く見られたもんだな」

ニアとギルダは再度剣を向けあい対峙する。

レアラはギルダが傍を離れた後竜巻によって裏通りの民家に叩きつ

けられていた。

その痛みで正気を取り戻す。

「うう・・・此処は・・・」

周囲を見まわすがケイトとリコが見当たらない。

その時不安や後悔が体の中にどつと流れ込んできた。

レアラは落ち込みそうな頭を左右に振る。

「今は悩んだり後悔してる場合じゃない・・・ケイトとリコを助けなくちゃ・・・」

レアラは体中の痛みに耐え、這いながら広場に辿りつく。

そこには数軒の民家が既に吹き飛ばされ無くなっていった。

竜巻の中では雨が降り、竜巻の外では雷も発生していた。

レアラは顔を引き締め何かを決意したようにケイトとリコをじっと見つめる。

「もう失いたくない・・・」

レアラが目を閉じ集中すると目の前に光に包まれた杖が出現した。

杖は色々な輝く石がはめ込まれている。

杖を両手で掴み地面を軽く叩く。

レアラは再度目を閉じる。

「童と契約し神獣よ！力を貸せ！ラリム！」

詠唱と共にレアラを中心とした魔方陣が描かれ、そこにリスに似た青く輝く生き物が出現した。

詠唱に力を使いすぎたのかレアラは腰を落とす。

「ラリムお願い。力を貸して。もう童にはそなたにしか頼む者がおらんのだじゃ・・・」

泣きながら懇願するレアラに、ラリムは近づき頬を流れる涙を舐め取った。

ラリムは小さく泣いた。

「クウウン」

「ありがとうラリム。やれるだけやってみる」

レアラは立ち上がりラリムを従えケイトとリコを見つめる。

「ラリム行こう！」

レアラは大きく一歩を踏み出した。

## ニアVSギルダ（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます！  
では次回11章で会いましょう！

後悔と・・・(前書き)

自分で書いてて少しないてしまった・・・レアラ!!!

読み終わると12話が待ち遠しくなった自分・・・。

あれ・・・これ俺書いてるんだっけ!?!12話すぐ書こう!

## 後悔と・・・

フィレーネ達聖騎士団は一軒一軒くまなく村人が中にいないか確認していた。

「このままじゃ村人に犠牲が出る可能性があるわ・・・」

フィレーネは竜巻によって民家がほとんど破壊されていく事にあせりを感じていた。

その時大通りに面した大きな民家から聖騎士団所属の男性声が響き渡る。

「村人がいたぞ！手を貸してくれ！」

フィレーネは声の方角に急行する。

現場に着くと竜巻が既に民家の一部を破壊していた。

そして民家の入り口では竜巻から民家と村人を守る為聖騎士団員達が銀色の盾を使い耐えていた。

「お前達もう少し耐えてくれ！」

フィレーネが盾を使い耐えてる団員に指示すると共に近くの団員に召集をかける。

「村人は中だ！手が空いてる者は手伝ってくれ！」

そう言うとフィレーネは竜巻から守ってくれている団員の横をすり抜け中へ入った。

民家の中では足枷を繋がれた村人が沢山いた。

体を抱き合い震える者、膝を抱え絶望するもの。

家の中は死の空気が漂っていた。

「とにかく全員村の外へ連れ出せ！時間は無いぞ！」

フィレーネの声に聖騎士団員達は弱っている者から順に対応し始めた。

その光景を確認した後で民家を出る。

そこへソフィアが血相を変えて走ってきた。

「他の民家にもまだ村人がいますわ！聖騎士団だけでは間に合いま

せんのだ！」

ソフィアの報告にフィレーネは齒を食いしばった。

「それでもやるしかない！この指揮はソフィアに任せる。私は竜巻を抑える！」

「わかりましたわ！」

フィレーネの言葉にソフィアは大きく返事をした。

フィレーネは竜巻の原因を探るべく走り出す。

ギルダとニアは広場から離れ、村の片隅にある民家の屋根で対峙していた。

「貴方強いですね。ですがあの少年をなんとかしなくて大丈夫なんですか？」

「お前を殺さないと後々やっかいそうだ」

ニアの言葉にギルダはあつさりと応えた。

会話が終わると同時にお互いに向かい走り出す。

目にも留まらぬ斬撃がぶつかり合い、刃の音を奏でる。

ギルダとニアは一通り打ち合うと再度距離を取る。

同時にギルダは刃こぼれした剣を捨てる。

「魔剣はやっぱり作りが違うね。これで剣4本ゴミになったぜ」

そう言うのと背中からまた剣を出した。

「貴方一体何本剣を持つてるんですか？化け物ですね」

「それはお互い様だろう」

ギルダとニアは剣を向けあう。

しかしニアは急に戦闘態勢を解いた。

「うーん。一旦今は引くことにします。まだあんまり体力減らしたくないもので」

「俺が簡単に逃がすと思ってるのか？」

「追ってくるのはいいですが、そっちはいいんですか？」

ニアは広場を指差した。

ギルダは横目に広場を見ると竜巻の数が増えていた。

「運がいいな。まあいい。さっさと消えてくれ」

ギルダの言葉にニアは笑顔で手を振った。

「それじゃ。またね」

そう言うところニアは村の外へ走って消えた。

「後々やつかいいになりそうだが・・・今は村が優先だな」

ギルダは剣を背中に戻すと広場に向けて走り出した。

広場の中央ではケイトが佇んでいる。

その姿を見ながらレアラはラリムと共にリコが倒れている場所へと走っていた。

竜巻がレアラの行く手を阻み足止めする。

「もう！童はもう何も失いたくないのじゃ！早く道を開けよ！」

レアラは足を動かしながら竜巻に文句を言う。

辺りを見回し通れそうな道を探る。

レアラは民家の間をすりぬけ一本裏の道へ走る。

「遠回りだけどしかたないないか・・・」

レアラは一人ぼやきラリムは従順についてくる。

路地裏を必死に走りながらレアラはぼやく。

「ニアが言っていた通り童はもう手遅れか？」

今までやってきた事の罰がこれか？

もう童にできることはなにもないのか？」

後ろでついてくるラリムは応えない。

「童のせいで大勢の人が死んだのか？」

童は逃げてきた。

大切な者を置いて逃げてきた後悔はどうすればよい！

童はどうしてあの時逃げた？本当に大バカだ・・・！

リコとケイトは救いたい。

これは偽善じゃない。

ただ・・・あの者達は・・・大切な者が変わったからじゃ！」  
竜巻の影響で民家の破片や屋外に置かれた木材がレアラへぶつかった。  
てくる。

レアラは石に躓き転ぶ。

頭に木の破片がぶつかり出血する。

それでも足を止めないレアラ。

竜巻の影響を受けない場所まで走った後、広場に続く小道を走りぬける。

広場の片隅で頭から出血しているリコを見つけた。

レアラは走り寄り抱き上げた。

リコの胸に顔を押し当てると心臓は鼓動していた。

しかし呼吸が小さかった。

「ラリム、リコの状態をチェックして回復をお願い！」

ラリムは小さく頷くと体が青く光り始めた。

リコの事はラリムに任せるとケイトに叫ぶ。

「ケイト！リコは大丈夫！生きてるよ！」

レアラの大きな声も理性を失ったケイトには全く届かなかった。

レアラはケイトを見ながら苦渋の表情で悩む。

「妖精と精霊を無理やり引き剥がすしか・・・」

レアラの言葉にラリムはキュルルと鳴いた。

「わかってる。私は王族である証の魔力を失うかもしれない。

そしたらラリムとも会えなくなるね・・・」

レアラの瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

「ああ、童はほんと大バカじゃ！この土壇場で自分の事を考えるなんて・・・」

レアラの悲痛な声が零れ落ちる。

「レアラはバカなんかじゃないわ」

突然の言葉にレアラは振り返るとリコがゆっくりと立ち上がった。  
いた。

「レアラの年でそれだけの事が言える。大したものよ。」

貴方は私の妹に似てる。我がままで素直で大きな魔力を持っているところもそっくり」

リコは胸を押さえながらレアラに歩み寄り抱きしめた。

「レアラに何があったか知らない。でもレアラの辛そうな顔、私は見たくない。」

バカケイトを止めるわ。力を貸してくれろ？」

リコが差し出す右手をレアラはじっと見た。

レアラは手を重ねる事に躊躇する。

リコが悲しそうに手を引こうとした時、レアラはリコの右手を両手で力強く掴んだ。

思いを感じ取るようにリコは左手をレアラの頭に優しく置いた。

そして笑顔で言う。

「ケイトとレアラは大切な大切な・・・仲間なんだから」

リコの言葉にレアラは再度大粒の涙を落とす。

「ケイトが待つてる。それに村人を助けなきゃ」

そう言うとりコはケイトの方を向き力強く見つめた。

ギルダは民家の屋根伝いに広場へ向けて移動していた。足場を確認しながら村全体を見渡す。

「うーん、大分村のあちこちに竜巻が移動してるな。」

「こりゃ・・・被害大きそうだな」

ギルダつぶやいていっていると下からギルダを呼ぶ声が聞こえた。

「ギルダ！あんたこんな所で何してるの！手伝いなさい！」

「手伝いたいんですけど、竜巻を止めないとまずいですよ？」

「竜巻の止め方知ってるの?!」

ギルダは考えるように視線を上へ向けた。

「まあ、知ってると言えば知ってますけど」

「それを早く言いなさい！すぐ向かうわ！」

「へいへい」

「返事はちゃんとしなさいって毎回言ってるでしょ！」

「了解！気をつけます！」

ギルダは地面へ飛んで降りるとフィレーネと共に走り出す。

「ギルダ何処へ向かうの？」

「広場ですね。そこに原因があります。」

二人は顔を見合わせ広場へ向けて走り出した。

後悔と・・・(後書き)

読んでいただきありがとうございます！

1 2話すぐに書きます！っていつか

次の日には必ず！

守ったものと・・・(前書き)

先日12話を失敗作のほうをアップしてしまい、読者の皆さんにご迷惑おかけしました！こちらが本命の12話です！  
では七つの宝玉の世界へ行ってらっしゃいませ！

守ったものと・・・

私はラリムの回復魔法によって徐々に腹部の傷が塞がりつつあった。

「大分回復してきたわ。ありがとう・・・えっと・・・」

ラリムを見ながら考え込む私にレアラは名前を教える。

「ラリムじゃ。童の大切な友達じゃ」

「ありがとう。ラリム助かったわ」

ラリムに笑顔で応えると嬉しそうに鳴いた。

私はラリムからケイトに視線を移す。

「レアラ状況を説明してくれる？」

「えっと・・・ケイトが暴走してる・・・」

「まあそれは見れば大体分かるわ。」

こんなケイト見るの初めてだし、原因は妖精と精霊がケイトの体内で暴走してるって事であってる？」

「うん」

レアラはケイトを見ながら頷く。

「リコを守護する妖精と精霊がリコを傷つけられ暴走したの。」

リコにこんなに多くの守護が憑いてたのは驚いたけど・・・」

「暴走の原因が分かれば解決の糸口が見つかるかもしれないわ。」

「わかる？」

私の問いに暫し沈黙した後レアラは口を開いた。

「リコには言っただけでなかったけれど童は精霊と妖精を束ねる王家の血筋なのじゃ」

レアラの言葉に私は淡々と応える。

「まあ、魔力を持っていたから普通の子じゃない事はわかっていたけど、

まさか皇女とはね。それで？」

「え、ああ・・・先ほどリコが戦った少年、ニアと言うんだけど、

ニアが持っていた赤いペンダントは王家に伝わるペンダントなのじゃ。

あれは妖精と精霊に対して絶対的な効力があるの」

「なるほど。それで？」

私はケイトを観察しながらレアラの言葉に耳を貸す。

「精霊と妖精の怒りはペンダントによってケイトの体に封じ込められた。

でも、あまりの数の多さにケイトの体は耐えられず漏れ出している。漏れ出した精霊達の怒りは行き場を無くし竜巻となって現れる・・・

「

「レアラも王家の人間だから命令に従ったりはしてくれないわけ？」

「王族にも命令系統に順番があるのじゃ。

童は王家で最も格下なのじゃ。だから王家のペンダントが出された以上童の命令は聞かぬ。

それに、万が一命令が通じたとしてもこの暴走状態では止まるかさえわからない。

あくまでも相手が冷静状態であればの話だから・・・」

レアラの言葉に私は考え込む。

「力づくで止めるしか手段ないわね」

「それをすればリコは今後精霊と妖精の加護は得られず信用も無くなる！」

私の言葉に強くレアラは噛み付いてきた。

「命令系統があるなら、緊急系統があるわよね？」

「あるにはある・・・でも緊急はあくまで緊急で王族の命に関わる時だけ」

「今でも十分王族が危険なんだけど・・・ね！」

私は竜巻で流されてくる木の破片を避けながら応える。

「良い方法を思いついた……。精霊達を冷静にさせ、尚且つ緊急系統が実施される方法……」

私の言葉にレアラは不思議そうな表情で見つめてくる。

「レアラ、ケイトの体はもってどれくらい？」

「え？……えっと……10分つてところじゃ……。何をする気じゃ？」

「やっぱりこれしかないか……。レアラごめんね」

私は瞬時にレアラの背後へ回り込み懐から出したナイフを首筋に押し当てた。

「冷静になれ！精霊達！レアラ皇女が死ぬぞ！？」

私の言葉にラリムはたじろぎ、ケイト達は睨んでくる。

ケイトに睨まれた事なんて今まで一度も無かった為正直たじろいだ。「リコ何を……」

レアラは驚いた表情で声をかけるが、私はケイト達の出方に神経を注いでいた。

「今からレアラ皇女の言う事を聞きなさい。聞かなければレアラ皇女は……」

私の言葉にケイト達は動きを止めた。

ゆっくり息を呑みつつケイト達を見つめ、レアラに目で合図をした。レアラは驚愕したまま見つめ返してくる。

そして、静かにレアラは声を出した。

「精霊と妖精よ、落ち着きたまえ……」

ケイトを開放し、童の命を守る為そなた達の力を貸してくれないか？」

レアラの言葉が終わり、私はじっとケイト達の出方を見つめる。

次第に竜巻は弱まり消滅した。

ケイトの体からも無数の精霊が飛び出していくのが目に見えた。そのまま地面にケイトはゆっくりと倒れこむ。

私はレアラの耳元に小さな声でつぶやいた。

「レアラ、ケイトの元へ行ってあげて。私は近寄れないから言葉と共にレアラを開放し、ナイフを懐へ戻した。」

レアラは、振り返り何か言いたそうな表情を向けた後ケイトに駆け寄って行った。

レアラの周囲には多くの妖精や精霊が輝いていたが次第に見えなくなった。

レアラは地面で倒れているケイトを抱き上げ安否を確認する。

「ケイトは無事じゃもう何も心配はいらない……。」

精霊と妖精よ自分の居場所へ戻り静かに暮らすが良い」

レアラはそう言い精霊たちを天へ導くように立ち上がり、手を大空へと挙げた。

レアラはしばらくそうしていたが、ゆっくり手を下ろした。

レアラは私の方を振り返る事無く口を開いた。

「リコ……何故あんな事をした……。童はちゃんと説明したであろ？」

精霊と妖精の信用を無くすと……。これがどれだけ重要な事かわかっ  
つておろうな？」

「わかってる……。」

レアラの低く怒気を含む声を聞き、レアラから目を逸らした。私は正しい事を行った。つもりだった。

でも、レアラに言われて、自分が大変な過ちをしてしまったのではという疑問が見え隠れする。

「ごめん……。」

私は誰にも聞こえない程の声で、誰に言うのでもなく謝った。

ギルダとファイレーネが広場に着く頃には竜巻は完全に消え去り、さっきまでの騒ぎとは打って変って静まり返っていた。

広場の中央では横たわるケイト、立ち竦むリコとレアラの姿があった。

リコの後方にはラリムがじっとしている。

「もう終わったのか？」

ギルダはレアラに近づきながら問うが何も応えない。

ギルダはリコやレアラの深刻そうな表情を見て気持ちを切り替えた。倒れているケイトへ近寄り安否を確認すると何も言わず抱き上げる。

「今から俺達は村人とコイツの治療をする。」

落ち着いたら連絡してくれ」

それだけ言うと、ギルダは村の入り口へ向けて歩き出した。

ギルダはファイレーネに目で合図をする。

「あ、ああ。後でまた」

そう言うとファイレーネもギルダの後を付いていった。

ギルダとファイレーネは横に並びながら大通りを歩く。

「何が、あ、ああ。後でまた。ですか。」

不自然にも程があるな」

ギルダは空を見上げながら言う。

「あ、ああ、あれは！喉が渴いてて言葉が詰まったんだ！」

ギルダはファイレーネの言葉に呆れた表情をする。

「隊長、聞きたいことは山程あるのはわかりますけど、空気を読みましょ？」

ね？わかるでしょ？空気ですよ？」

「ああ！もう！ギルダに言われると腹が立つ！決着つけるか！？」  
「はいはい。又今度。今は怪我人が第一優先です。ですよね？隊長？」

「わかってるー・・・」

ギルダに言い包まれたフィレーネは肩を落として歩いていく。  
そんなフィレーネにギルダは口元に笑みを浮かべた。

ギルダとフィレーネが去った後レアラは口を開く。

「ケイトの横に妖精がいるの・・・。リコに見える？」

ケイトの横を見るが何も見えなかった。

「何も見えないわ・・・」

私の返答にレアラは何も応えない。

次第にレアラのすすり泣く音が聞こえてきた。

私は大粒の涙を零すレアラの背中を見つめる。

「リコは巫女の事を何にもわかってない！」

レアラは突然大きな声で叫ぶ。

「村人とケイトを守りたいのは童も一緒じゃ！」

他に方法はなかったの？！

リンの命を救った時だってそう！

巫女の命を何だと思ってるの？！

もうわかってるでしょ？

リコはもう巫女じゃない！」

レアラの言葉に対して私は何も言えなかった。

泣きながら喋るレアラを前にして・・・。

レアラは涙を袖で拭くと大通りを全力で走って行った。

私は一人レアラの背中を見つめるしかなかった。

守ったものと・・・(後書き)

では13話であいましてっ！

少女たちの心中（第一部ネバルゲ村編完）（前書き）

第一部中途半端に終わりました！（汗）

っていうか終わり方が中途半端すぎてごめんなさい！

では本編へどうぞ！

## 少女たちの心中（第一部ネバルゲ村編完）

村の入り口にある無事だった民家を使い、聖騎士団達は村人とケイトの治療を始めていた。

民家の中は怪我人が数名横になっている。

「私も手伝います。」

「ん？ああ。頼む」

私の言葉にギルダはちらりと顔を上げ場所を空ける。

横になって眠るケイトと村人達。

私はケイトの怪我を確認した後、ギルダから治療箱を借り治療を始めた。

「あの、皆を助けられてありがとうございます」

私は手を動かしながらギルダに言った。

「それはお前さんも一緒なんだろう？」

ギルダも手を動かしながら言う。

「私は何も出来ませんでした。いえ、えっと・・・皆さんが来なければ私は死んでました」

喋りだしてから相手の名前を知らない事に気付く。

ぎこちない言葉から察したのか、ギルダは自己紹介をしてくれた。

「俺はギルダだ。で、さっきいた人は俺達聖騎士団の隊長フィレーネ」

「私はリコです。名前を言うのが遅くなってすみません。水の里から来ました」

私もギルダにちらりと顔を向ける。

黙々と治療をする私とギルダ。

しかし、突然ギルダが口を開いた。

「譲ちゃんと何かあったのか？」

「レアラの事？特に何も・・・」

ギルダは疑い深く私を見つめてくる。

「何もありませんよ」

私の言葉にギルダは観念したのか治療に目を戻した。

治療をしているとリンとレンの事を思い出した。

「あー！」

私の突然の声にギルダは顔を顔を向けてくる。

「あの、10歳程の小さい男の子と女の子は見かけませんでしたか？！」

私の知り合いなんです！」

ギルダは考え込んだ後近くで治療をしている仲間にも声をかけた。

「おい、10歳程の小さい子供見てないか？」

呼びかけられた男性は何かを思い出したように話し出す。

「そう言えば、さっき広場の方へ乗馬した子供2人が入っていきましたよ？」

私は男性の言葉を聞いた瞬間立ち上がった。

「あの！すぐ戻りますから！」

それだけ言うと民家を走り出した。

広場ではリンとレンが両親と抱き合っていた。

私は切れた息を整えながらその光景を見つめる。

「良かった……。無事会えたのね」

私の声にリンとレンは振り向く。

リンは私を見つけると真っ直ぐ走り寄り抱きついてきた。私も抱きしめ返す。

「リコさんありがとうございます！」

レンは大きな声で言うように左右に立つ両親に笑顔に向けた。

その光景につられて私も笑顔になる。

「お姉ちゃんありがとうございます！」

リンも笑顔で私に言う。

「良かったね。リンちゃん」

私も微笑み返す。

「子供達から話は聞きました。命を助けていただいていたありがとうございます！」

リンとレンの父親が熱心にお礼を言ってきた。

「いえ、私は何も・・・」

レアラに言われた事が頭から離れなくて、私は素直に喜べなかった。

私はレン達親子に怪我人を見てきますと告げ早々に別れた。

色々な思いが頭の中を駆け巡る。

それが嫌で、私は村人の治療に専念した。

気付けば夜になっており、村人の治療は一通り終わった。

疲れた体で民家を出て、月が闇を照らす中一人大通りを歩く。

私は手を開いたり閉じたりさせる。

「魔力を何も感じない・・・」

私ほんとに巫女の力無くなったんだ・・・」

呆然と歩いているうちに、いつの間にか村近くの巨岩まで来ていた。巨岩を登り寝転ぶ。

「月が綺麗・・・」

私は少し欠け始めた月を見上げる。

「里の皆元気かな・・・」

お母さん・・・、サーニャ・・・」

レアラは外郭に背を預け、呆然と月を見上げていた。

横ではラリムが心配そうにレアラを見つめる。

レアラの頭上ではルーリが塞ぎこむように座っている。

「何であんな事言ってしまったんじゃ・・・」

リコの気持ちは痛い程わかっておったはずなのに・・・

そもその原因は童にあるというのに・・・」  
レアラは脚を手で引き寄せ頭を埋めた。  
そんなレアラを見てラリムは小さく鳴いた。

大通りに佇む大きな民家に聖騎士団員達が集まっていた。  
大きな机の上に地図が開かれ、ソフィアとフィレーネを囲むように  
団員達は立っている。

「諜報部隊によれば、現在水の里には巫女はおらず、水の神殿に向  
かったと言う事ですわ」

ソフィアの言葉を聞き、フィレーネは腰に手を当て考える。

「選択肢は一つか・・・。アシスの隠れ里・・・」

「そうなりますわね」

ソフィアとフィレーネは、地図から他の方法がないかじっくり見渡  
す。

「もしあったとしても、村人を連れて危険な道は渡れないか・・・」

フィレーネは自分の言葉に納得し、ソフィアも頷く。

「皆良く聞け！村人の怪我の具合次第ですぐに村をでる！

怪我人には1日でも早く歩けるようになってもらいたい！何とかし  
てみせよ！」

「はっ！」

フィレーネの大きな声に聖騎士団員達は、胸の前に拳を当て大きな  
声で返事をした。

「ソフィア、後任せる」

「何処へいかれるのですか？レアラ皇女のところですか？」

「ああ、まあそんなところだ」

フィレーネはソフィアに小さく手を振り民家を後にした。

月に照らされた大きな人影がレアラに近づく。  
ラリムはそれに気付कि威嚇するが、相手は平気な顔してレアラに近づいてきた。

ギルダは膝に顔を埋めるレアラに対して、空気を読まない明るい声をかける。

「よっ！」

レアラは顔を膝から出し、チラリと自分の前に立つギルダを見る。

「なんだ、お主か」

「失礼な物言いだな。俺はギルダだ。讓ちゃんの名前は確か・・・  
レアラだっけ？」

「勝手に名前を呼ばないで。今は誰とも話をしたくない。あっち行って」

レアラは不機嫌な声と目でギルダを威嚇する。

「まあ、そんな睨むな」

ギルダはそう言うと、身軽に外郭の上へ身軽そうに飛び乗った。

「讓ちゃんはこれから聖騎士団と行動してもらおう事になるぜ」

「は?!なぜ?!」

ギルダの言葉に対して驚きの表情を見せる。

「フィレーネが決めた事だからしょうがない。

ちなみにフィレーネは聖騎士団の隊長な」

「童をどうするつもりじゃ？」

「さあな。とりあえず聞きたい事沢山あるんじゃないか？」

讓ちゃん何か知ってるんだろ?この騒ぎの原因」

ギルダの言葉にレアラは遠くを見つめた。

「童は・・・」

レアラが深刻そうな表情で僅かに口を開く。

そんな時遠くから足音が聞こえてきた。

現れたのはフィレーネだった。

「ギルダ、また勝手に行動して・・・。

この方の事は私に任せてあっちへ行つてなさい」

「へいへい」

「返事は1回！」

「へ〜い！」

ギルダはフィレーネに怒鳴られた後、外郭の上から民家の屋根へ飛び移り闇に消えた。

フィレーネはギルダの気配が消えた事を確かめると、レアラ皇女に歩み寄り体をしゃがませた。

「レアラ皇女、お願いです。この地にいる理由をお教え願えませんか？」

それと、闇の神殿が襲撃された件について何かご存知ですか？」

フィレーネの言葉にレアラは目を大きく広げ驚愕した表情を見せる。

「え？どう言う事じゃ！？」

「それを私も聞きたいのです」

大きな声で聞き返してくるレアラに、フィレーネは冷静に言葉を返す。

フィレーネの言葉を聞いた後、レアラは地面に視線を移した。

「ステネイラで何があつたんです？」

フィレーネは再度呼びかけるとレアラは涙を零した。

しばらくしてレアラは落ち着きを取り戻し顔を上げた。

「フィレーネとやら、童の事を知っているのか・・・？」

「ええ。存じております。一度だけ、レアラ皇女がもっと小さかった頃にお会いしています」

「そうか・・・。ならば、童の母も知っておるか？」

「サクラ王女ですよね？」

「うむ。」

レアラの質問にフィレーネは真剣に応える。

レアラは暫し沈黙した後、俯いた表情で口を開いた。

「童はもう皇女ではないのじゃ」

レアラの言葉にフィレーネは一瞬返す言葉を失った。

「どう言う事です？意味がよくわかりません」

フィレーネの言葉に対してレアラはゆっくりと口を開く。

「神聖ラドナ王国は、ダージ王国に攻め滅ぼされたからじゃ」

レアラの口からでる言葉は、フィレーネの認識から大きく逸脱していた。



少女たちの心中（第一部ネバルゲ村編完）（後書き）

1部無事おわりました！

次回から2部神殿編に突入します！

では14章でお会いしましょう！

## 見えてくる世界（前書き）

更新おそいらミレシア事ラミレシアです！

二部編突入おめでとございます！パチパチ！

では早速二部編の14章本編どうぞ！

## 見えてくる世界

「滅ぼされたつて・・・神聖ラドナ王国は確か精霊と妖精の国で、滅ぼすなんて事・・・ありえないはず・・・」

それに、ダージ王国ってラドナ王国の守護国だったはず・・・」  
フィレーネはレアラに確認するように言葉を紡ぐ。

「童の頭の中にある常識もそれと同じじゃ・・・」  
レアラは付け足すように呟く。

「童は厳密に言えばこの地に逃げてきた・・・。  
家族と仲間を置いてじゃ・・・。最低じゃ・・・」

「闇の神殿を襲った事については何かわかりますか？」

フィレーネは続けて質問するが、レアラは下を向いたつきり何も応えなかった。

フィレーネはレアラを見つめた後立ち上がり、村の中へ戻っていった。

フィレーネが大通りを歩いてると、民家の影からギルダが出てきた。

「やっぱり聞いてたか」

「そりゃー気になりますよ。隊長が無茶しななかった」

「事態は思った以上に深刻かもしれない」

「かもしれない？深刻確定ですよ」

ギルダに言葉を訂正され、フィレーネは一息ついた。

「ステネイラ大陸の事は知っていたのか？」

「まあ、それなりに」

ギルダの言葉に対してフィレーネは考え込む。

「地方に散った聖騎士団と巫女長テリネス様と連絡を取りたい」

「やれるだけの事はやってみますよ。でも俺は此処にいさせてもらいます」

「好きにしろ」

フィレーネの言葉にギルダはガッツポーズで喜んだ。

そんなギルダを見てフィレーネは呆れた表情で一息ついた。

翌朝私は聖騎士団に呼ばれ、ケイトの具合を見た後指定された小さな民家に赴いた。

ドアを開け中に入るとフィレーネがいた。

「お邪魔します・・・」

「まあ、その椅子に座ってくれ」

フィレーネに促され素直に椅子に座る。

「まずは自己紹介をさせてくれ。」

私はフィレーネ。聖騎士団隊長をしている者だ」

「聖騎士団!？」

フィレーネの自己紹介に驚きの声をあげてしまった。

「うん? そうだが・・・何か?」

「いえ・・・私は水の里ゴズから来ました。リコと申します」

私の自己紹介に今度はフィレーネが驚きの声をあげた。

「水の里!？」

「ええ・・・」

「もしかして水巫女と一緒にして事はないわよね?!」

フィレーネは私の肩を掴み問い詰めるように聞いてきた。

私は肩の痛みと驚きで、すぐに反応できなかつた。

それを見てフィレーネはすぐに落ち着きを取り戻し手を離す。

「すまん・・・」

「いえ・・・何かあったんですか？」  
私の質問に対して言うべきか悩むフィレーネ。

「なんとというか・・・火の神殿と闇の神殿が襲われた。  
リコさんに言っても困るだろうが・・・」

「え！？闇の神殿も!？」

私はつい驚きの声をあげてしまった。

「も？リコさんは何か知ってるのか？」

フィレーネに追求されて私は慌てた。

「え、いや・・・風の噂で火の神殿が襲われた事は聞いたんです  
私に疑いの目を向けてきたが、知らん顔をして凌いだ。

「まあいいか。ところでリコさんは何故ネバルゲ村に？」

「火の神殿が襲われたと聞いたので、水の神殿の様子を見に行くところなんです」

「失礼を承知で聞きます・・・。巫女の守護人だったりします？」

「まあ・・・そんなところですね」

「って言う事は怪我で寝ている少年も?!水巫女もこの村の何処かにいるんですか?!」

「い・・・いえ、巫女は事が事なので先に神殿へ向かわれました。

私とケイトは食料や水を補給する為に丁度村に寄ったんです。

そしたら、今回の件に遭遇しまして」

「そう言う事ですか」

フィレーネは私に背を向けると、何かを考え込むように小さく唸りをあげた。

「あの、聖騎士団の方々は宝玉の件では動いていらっしやるのです

か？」

突然の質問にフィレーネは慌てて振り返り口を開いた。

「動いている・・・かな？」

「かなって・・・」

「正直言つと動けないが正しい。闇の神殿が襲撃された時に、聖騎士団も同時に巻き込まれたの。」

襲撃者に対してあらゆる抵抗を試みたわ。

でも襲撃者の使用する武器があまりに恐ろしい物だったの」「  
フィレーネは当時を思い出したのか一瞬怖い表情を見せた。

「此処を襲つた者達が使つていた武器を見た？」

「ええ。見ました。筒みたいな武器ですよね？」

「あの武器の超巨大版とさえわかる？」

私は愕然とし、言葉がでなかった。

「現状として、我ら聖騎士団は人命を優先に動いてる。」

どっちにしても宝玉へは巫女と守護人しかたどり着けないから。

我らは、村人の治療がある程度済み次第アシスの隠れ里へ移動するつもり。

貴方達は どうする？」

呆然としていた私はフィレーネの言葉をあまり聞いていなかった。

「あ・・・いえ・・・私達はケイトの怪我が治り次第水の神殿へ向かいます」

「そうか。わかった。もう自由にしてくれていい。」

私は椅子から立ち上がり軽く会釈をし出入り口に向かう。

「そうそう、貴方達の馬は村の入り口にある馬車にいる。」

それと、旅支度もあるだろう。何か入り用の時は声をかけてくれ。できるかぎりの世話はさせてくれ。

水生の宝玉を・・・是非とも守ってほしい・・・」

「はい」

私は小さな声で返事をして民家を後にした。

私の心の中では迷いと不安が入り交ざる。

（私に守れるのだろうか・・・巫女でなくなった私に・・・）

## 見えてくる世界（後書き）

読んでいただきありがとうございます！  
では二日後くらいに15章で会いましょう！  
では！

## ケイト目覚める(前書き)

読者様に読んでいただきたいとあせって応募してしまう、ラミレシアです。

できればもつと沢山の話盛り込みたいのですが、

中々すすみません><

とりあえず15章どうぞ！

## ケイト目覚める

私はフィレーネとの話が終わった後、ケイトの様子を見に向かった。怪我人が収容されている民家に入ると、昨日より横たわっている人は少なくなっていた。

怪我が軽く、起きている人同士の会話が小さく聞こえる。

私は眠るケイトを見つけると真っ直ぐ向かった。

両膝を突きケイトの怪我を確かめる。

（大分良くなってる・・・大丈夫そうね）

ふと、ケイトの頭上に草を編みこんだ小さな紐の様な物が置いてあった。

私は不思議そうに小さな紐を持ち上げる。

すると何故かわからないけれど、レアラが作った様なイメージが湧いた。

私の近くで、壁に寄りかかりながら本を読んでいる男の人に聞く。

「あの、此処へ髪を丸く結んだ女の子来ませんでしたか？」

男の人は私の声に気付き顔を上げる。

「うん？ああ、さっきまでいたよ。君が来る少し前に出て行ったかな」

「そうですか。ありがとうございます」

私は小さな紐に再度視線を移した。

（やっぱりレアラだ・・・）

私はこの小さな紐の意味がわからなかったが、とりあえず元の位置に戻した。

レアラに会った時に、なんて声をかければ良いか考えると自然と表情が暗くなった。

すると、突然私に声かけられる。

「何でそんな悲しそうな顔してるんだ？」

気付くとケイトが目を覚ましていた。

私は顔が真っ赤になった。

「だ・誰が悲しい顔してるって!? ばっかじゃないの! 起きてるなら起きてるって言いなさいよ!」

私はさっきまでの自分を誤魔化すかの様に言葉を捲くし立てた。

「リコ、涙が零れてるぞ?」

「え・」

ケイトの言葉を聞き、目元に指を当てると涙が溢れ出ていた。

「どうして・・・」

私はケイトに表情を見られたくなくて此処を出ようと立ち上がるうとした。

しかし、ケイトが急に私の腕を掴んだ。

私はケイトに向かって倒れこむ。

「きゃ!」

すぐに起き上がろうとしたが、体中から力が抜けたように動けなくなった。

そして、私はケイトの胸の中で小声で泣いた。

色々な思いが溢れ出るように涙が溢れた。

ケイトは動かず、私の頭を優しく撫でていた。

レアラはフィレーネとソフィアと共に民家の一室で今後の事について話し合っていた。

「レアラ様には今後、我々聖騎士団と共に行動してもらいます。よろしいですね?」

フィレーネの話を聞いているのか聞いていないのかわからないが、レアラは俯いたまま地面を見つめていた。

「レアラ様聞いてますか?」

「あ?! ああ・ああ・」

レアラは上の空の様な返事をする。

フィレーネとソフィアは困った表情で見合わせた。

今度はソフィアが動いた。

体をしゃがませレアラの顔を下から覗き込む。

「レアラ様、どうされたんですの？」

何処か痛みますの？」

「すまぬ……」

レアラはソフィアの言葉に対して謝るが、目を合わせようとはしなかった。

「レアラ様、明日の午前中には此処を立ちアシスへ向かいます。

ですから、今日はちゃんと休んでおいてください」

フィレーネの言葉に対してレアラは何も反応しなかった。

フィレーネは何処か行くところがあるのか、ソフィアに後を任せ部屋を出ようとした。

「童はもう皇女ではない……。連れて行く意味はない……。レアラは地面を見たまま咳く。」

「レアラ様なら分かっているとは思いますが、国が滅んでも血は絶えてはいないんです。」

部屋の外にいる神獣がその証拠です。貴方がいれば復興もできるんですよ？」

「復興……？復興に何の意味があるのじゃ……」

「本気で言ってるんですか？」

フィレーネの怒気を含んだ低い声を最後にレアラは沈黙した。

沈黙したレアラの背中をしばらく見つめた後フィレーネは部屋を後にする。

フィレーネが出た後もレアラはずっと沈黙したまま動かなかった。

ソフィアはしばらくレアラと同じ部屋にいたが、用事を思い出したかのように部屋をでる。

レアラは部屋に一人椅子に座っている。

拳を強く握るレアラ。

「そなた達に何がわかる・・・」

静まる部屋にレアラの悲しみに満ちた声だけが部屋に響いた。

## ケイト目覚める(後書き)

読んでいただきありがとうございます。  
次回も早めに更新したいと思います！  
では16章で！

## ケイト夢の日常（前書き）

こんにちわ。毎回読んでいただき本当に感謝！  
今回は夢のような話です。  
では本編へどうぞ！

## ケイト夢の日常

私はケイトの胸で泣いた後少し気持ちが楽になった。

「ごめん・・・らしくなかったね」

私は涙を拭きながらケイトを見た。

ケイトは呆然と私を見つめてくる。

「ああ・・・」

私を見つめたまま動かないケイト。

「ケイト？どうしたの？」

「あ・・・いや・・・お前・・・かわいいな」

「は！？え！？」

ケイトの一言にドキツとする。

「何言つてんの！？ちよつと！」

私は動揺し、ケイトの頭を軽く叩いてしまった。

強く叩いてないのに倒れこむケイト。

「え！？ちよつと！？ごめん！？ケイト！」

私はすぐさまケイトの上半身を支えながら起した。

（私は一体何やってるの！？）

ケイトの両肩を掴み揺さぶる。

「ケイト、しつかりしろ！？」

「お・・・おう！危なかつたぜ・・・天使に命持つてかれるところだった」

ケイトはやつと正気を取り戻した。

私は何故か今のやり取りだけで精神的に疲弊していた。

ケイトが動ける事を確認した後、村はずれの外郭に移動した。

気持ちを切り替えケイトと向き合い私は今までの話を始めた。

やはりケイトは精霊と妖精に憑かれていた時の事は何も覚えていなかった。

「つまり、この村を壊したのは俺!？」

「さつきからそう言ってるでしょ」

ケイトは信じられないといった表情で辺りを見渡す。

「あそこの家も?あれも?これも?」

ケイトは半壊した家や跡形も無くなった家を指差す。

「そうよ。全部よ」

私の指摘に、口を丸く開けて啞然とするケイト。

「まあ、それはともかく、明日か明後日には此処を出るから」

「ともかくって・・・村人が住む家どうするんだよ?」

「村人はアシスへ移動するらしいわ。聖騎士団と共にね」

「そうか・・・悪い事したな・・・」

私はケイトの言葉に溜息をついた。

「あのね、ケイトが家を壊したから村人はこの村を出るんじゃないの。」

事が事だから村を出るのよ」

「そうなのか!？」

「あつたりまえでしょ!?!ほんとにバカね!

さつき泣いた涙を返せ!」

「それは無理。俺の宝物だから」

(反応はやっ・・・)

「何で其処だけは反応早いのよ・・・」

私は呆れた表情でうな垂れた。

「まあ、とにかく出発の準備するから荷物はまとめておきなさい」

私が顔を上げケイトの表情を見ると何か考え込んでいた。

「どうしたの?」

「いや・・・リンとレンとレアラはどうなるんだ?」

「リンとレンは両親と共に行動すると思うわ。レアラは・・・」

私は視線を地面に落とした。

「知らないわ」

私は表情を曇らせる。

「何かあったのか？」

ケイトは覗き込むように私を見る。

私はケイトにレアラが皇女だと言う事を話した。

「皇女って、何処の皇女？メイアスに皇女なんているのか？」

「ううん・・・この地には皇女はいない」

「どう言う事だ？言ってる事が滅茶苦茶だぞ？」

「私も書物でしか知らないけれど、恐らくステネイラ大陸の皇女よ」

「ステネイラ？何だそれ」

私はケイトになんて言えば良いのか迷った。

「私達が住む場所がメイアス。それとは別の場所にステネイラ大陸と言つ大陸があるのよ。」

私も書物でしか知らないわ」

「へ〜」

私の話にはケイトは関心を持ったようだった。

「レアラの言う事に信憑性はあるのか？」

「恐らく本当。レアラは実際に神獣を召喚してたしね」

「まじか！？俺どうすればいいんだ！？皇女だろ！？」

「バカ、へたげに動揺するんじゃないわよ」

「まあ、とにかくレアラに会って話しをしてみないと分からないな」

「そ・・・そうね」

私はケイトの言葉に少し動揺した。

話を終え、しばらくレアラを探しに村の中を回ったが結局見つからなかった。

「まあ、そのうち会えるだろうぜ。先に準備でもしちまうか」

「そうね。私は食料と水の手配して、それからフィレーネさんに挨拶しておくわ。お世話になったしね。  
ケイトは馬の方見といて。村の入り口の馬小屋にいるって聞いているから。」

終わったらケイトが寝ていた民家で落ち合いましょ。」

「了解。ギルダさんにも挨拶しておくか。そう言えばルーリも見ないな・・・レアラと一緒になのかな・・・」

「ルーリ？誰それ？」

「お前に会いたがってた妖精さ。まあ、そのうち見つかるだろ。それじゃ又後でな」

ケイトは自分の作業に取り掛かるため動き出した。

私はケイトの背中をじっと見つめていた。

「妖精か・・・」

私は表情を曇らせた。

ケイトは一人、周囲を見渡しながら大通りを歩いていた。

「大分壊れてる家があるな・・・。」

ほんとにこれ俺がやったのかよ・・・」

ケイトがつぶやいていると、ギルダが背後からケイトに声をかけた。  
きた。

「よ！少年！」

「あ、ギルダさん。なんかすみません。リコから色々聞きました。

ご迷惑かけました」

「気にするな。はじめは良くある事さ」

「ん？初めは？」

「まあ、気にするな。ところでケイトだっけ？ケイトの彼女は一緒じゃないのか？」

「彼女ってそんな・・・照れますよ」

恥ずかしそうにするケイトを興味ありげにギルダは横目で見ていた。  
「リコはフィレーネと言う人に挨拶に行きました。俺は今から馬を見に行くところなんです」

「そうか」

ケイトとギルダは横に並んで大通りを歩く。

「そう言えば、ギルダさんに頼みごとがあつたんです」

「なんだ？」

「少し剣技を教えてもらえないでしょうか？」

「何で俺に聞く？」

「何でと言われても・・・。ただ、ギルダさんから何か特別な力を感じる気がするんです」

ケイトは説明に困ったようで、下を向きながら説明する。

そんなケイトを見てギルダは口元に微かな笑みを浮かべた。

「構わねえぞ。教えてやる。条件がいくつかあるけどな」

「ほんとですか!？」

ケイトは顔を上げ満面の笑みでギルダを見た。

ギルダは照れくさいのか頭を掻いた。

## ケイト夢の日常（後書き）

読んでいただきありがとうございます！  
次回17章でお会いしましょう！

## リコとレアラ（前書き）

こんにちわ！ラミレシアです。

久しぶりの更新です！リコとレアラ仲良くなれるかな・・・

## リコとレアラ

私はフィレーネを探す為、民家を探し回った。

大きな民家をノックするとフィレーネの声が返ってくる。

「入っていいぞ」

フィレーネから許可を得て戸を開けると、中には聖騎士団の方々が  
大勢集まっていた。

「あ、すみません。」

私に大勢の視線が集まり、なんとなく戸を閉めようとした。

「待ってくれ」

いきなりフィレーネに声をかけられ手を止める。

私がフィレーネに声をかけられた事により、更なる視線を浴びた。

「あ、はい」

私は緊張した面持ちで立ち尽くす。

「ソフィア、後は頼む」

「了解ですわ」

ソフィアは、フィレーネに返事すると共に私を観察するようにじつ  
と見つめていた。

フィレーネは私を押し出すように外へ出る。

「すまない。ちょっと打ち合わせをしていたものでな。

誰か探していたのか？」

「フィレーネさんに明日か明後日には村を出る事を言っておこうと  
思いました。」

「そうか。わざわざすまないな。旅支度なら、村外れにある井戸に  
隣接している民家でできるはずだ。」

話はもう既に通してある」

「ありがとうございます」

私はフィレーネに軽くお辞儀をする。

「そちらの話はそれで終わりか？」

「え？あ、はい」

「ならば場所を少し変えよう」

突然フィレーネに場所変えを提案され、私は後をついていく。

私達は村の最奥に向かう。

そこには何かが埋められたような砂の跡地が残っている。

「此処は・・・」

私は辺りを見渡す。

「此処は今回の件で死んだ村人の墓だ」

フィレーネの言葉に私は目を大きく広げ息を呑む。

「死者は12名。そして12名全員が水巫女の居場所を断固として  
言わず、

反抗的という名目で殺されたそうだ」

フィレーネの言葉と連動するように私の心臓が大きく波打つ。

「水巫女に会ったら伝えてほしい。今度ネバルゲ村に立ち寄る事が  
あつたら、

手を合わせてあげてほしいと」

私の目から涙が溢れる。

この時思った。

水巫女という代名詞の重さを・・・。

水巫女は誰にでもなれる物じゃない。

そして、水巫女を信じる者がいる。命を賭けてまで・・・。

私は口元に手を当て嗚咽を漏らす。

レアラの言葉が頭に響く。

” 巫女の命を何だと思ってるの!?”

私はゆっくりと口を開いた。

「ちゃんと・伝えます・。水巫女様に・。」

私は鼻水と涙でうまく喋れなかった。

その後フィレーネと共に、墓の前で目を閉じ手を合わせた。

しばらくして目を開け涙を拭く。

誰かの視線に気付き目を向けると、フィレーネはじっと私を疑う様に見つめていた。

「な・何か?」

「いや・何でもない」

フィレーネは墓に視線を戻すとゆっくり口を開いた。

「申し訳ないが、今後レアラ様は我らと共に行動する。」

フィレーネの言葉に私は啞然と立ち尽くす。

「それ・は、決定事項ですか?」

「そうだ。レアラ様には巫女長テリネス様とお会いになってもらう。

その為、我々は光の里へ向かう」

「テリネス様・。」

私は一度だけ会った事がある、聖母の様な女性を思い出した。

「あの・・メイアスで何が起こってるんですか?」

テリネス様と面会なんてただ事ではないはずですよ」

「正直、全体の把握はわかっていない。

レアラ様が齎した情報だけが唯一の手がかりと言ったところか」

「どんな情報なんですか？」

「ステネイラ大陸にある精霊と妖精の国、ラドナ王国が攻め滅ぼされた」

私は驚愕し、声がでなかった。

「まあ、真偽は定かではないが、どちらにしても事態が事態だ。動かないわけにはいかない。」

フィレーネは真剣な表情で私に語りかける。

私も事態の大きさに驚きながらも応える。

「私達にできる事があれば言ってください」

私の言葉に対してフィレーネは笑みを向けた。

「ああ。もちろんそのつもりだ」

私はフィレーネと別れた後、再度レアラを探して村の中を走り回った。

夕刻頃に私はレアラを見つけられる事ができた。

レアラは、夕日に照らされながら外郭に背を預け、俯いた表情で座っていた。

私はゆっくりレアラに歩み寄る。

「レアラ」

私の声に、レアラはゆっくりと顔を上げこちらを見る。

するとレアラは目元を赤らめ泣いていた。

私の顔を見ると大きな声をあげて泣き始める。

「レアラ!?」

私は素早く駆け寄り、体をしゃがませるとレアラに怪我がないか全身を見渡した。

「どうしたの?!大丈夫!?!」

レアラは私の声に反応するように抱きついてきた。

私も、泣き続けるレアラをゆっくりと抱きしめ返す。しばらくレアラは泣き続けた。

溜め込んでいた物を吐き出すかの様に。

レアラは落ち着きを取り戻すと私から離れた。

「リコ、ごめん」

「ううん」

私はレアラの真正面に座っていたが、レアラの横へ移動し座った。

そして、息を大きく吸い込む。

「レアラごめん!」

急な私の言葉に、レアラは驚いた表情で見つめてくる。

「レアラの言いたい事わかった。だから謝りにきた」

「え?」

レアラは啞然と私を見つめる。

「さつきね、フィレーネさんに言われたの。」

水巫女の居場所を吐かなくて、殺された村人の話を」

私は自分自身に言い聞かせるように話す。

「ずっと、巫女は皆を守る存在なんだって思ってた。だから、私が巫女を辞めても、次の巫女が皆を守るんだってずっと思ってた。

実際に皆を守る存在でありたいと思ってたしね」

私はレアラの方を向く。

「本当は違った。私は皆に守られていた。

思いついてたんだなって思う。

これだけの人に守られて、それに対して私がしてきた行為は跡継ぎがいるから自分はどうなっても良いと……。

水巫女の為に命を張った人に対して、失礼極まりない……。

だからね……。もう巫女の力なくても、亡くなった村人の為に私はできる事をしたい。

できるなら、もう一度巫女として……」

「リコ、今度は自分を責めすぎじゃ!」

レアラが突然声を張り上げたので、私は話を止め目を丸くする。

「リコの言いたい事はもう童に伝わった! もう……よい……。

今度は童に話をさせてくれないか?」

レアラは高ぶった感情を落ち着かせ、恥ずかしそうに私を見る。

「うん。レアラの話聞かせて」

私も真つ直ぐレアラを見る。

「あの時、童はリコを責める権利などなかった。  
リコは・・・皆を救ったのだから・・・。すまなかった・・・」

レアラはぎこちなく私に謝罪する。

私もレアラの言葉を真正面から受け止める。

「リコに巫女であってほしい！

本当に心から・・・そう思ったのじゃ・・・」

表情を曇らせるレアラに私は笑顔を向けた。

「ありがとう。レアラ」

私の言葉にレアラは小さく頷いた。

私とレアラは、しばらく外郭に寄りかかり空をみあげた。

「リコ・・・、童は母上やサヤナ・・・それに故郷を取り戻したい」

レアラは地面を見つめながらつぶやく。

「手伝・・・」「いいよ。私でよければ」

私はレアラが言いたい事が読めたので、同時に喋った。

「私は水の神殿へ行かないといけないから、それが済んだらレアラの国へ行こう」

私は笑顔でレアラに向き直る。

「ありがとう。リコ」

レアラは泣きながら笑っていた。

「レアラ、笑いたいのか泣きたいのかわからないよ？」

「だって・・・嬉しくて・・・嬉しくて・・・」

「私も嬉しいよ。レアラとちゃんと話ができて」

私はレアラの頭に手を添えて優しく撫でた。

するとレアラの頭上で、手に妙な感触を覚えた。

「あれ・・・レアラの頭に何か・・・」

私は再度レアラの頭を撫でる。

しかし、もう何かに触れる感触はなかった。

レアラは何かを探すように地面をじっと見渡している。

「レアラどうしたの？」

「えつとね・・・童の頭上にはルーリという妖精がいたのじゃ・・・  
あ！いた！」

レアラは、何かを掬い上げるように手を地面に添える。

「かなり小さくなっておる・・・」

レアラは悲しそうな表情で手の平を見つめる。

「ケイトも言ってたけど、ルーリって・・・」

レアラは手の平を前に出し、私の言葉を遮る様に真っ直ぐ見つめる。

「この子はそなたの妖精じゃ。」

だが、妖精や精霊達からの信用を失ったりニコに、この子の主である資格は無い。

だから、ニコにはルーリの姿が見えないはずじゃ」

私はじっとレアラの手の平を見つめるが、言われたとおり何も見えなかった。

「もうじきこの子は消える。童にも見えなくなる・・・」  
レアラという言葉に、私は胸が苦しくなった。

「そう・・・」  
私は言葉少なく応えた。

「何しんみりしてるんだ？譲ちゃん達」

突然ギルダが外郭から顔を覗かせた。

私とレアラはギルダに視線を移す。

「そなたには関係ない話じゃ！

あっちへ行っておれ！」

レアラは部外者を追い払う様な仕草をする。

「連れられないな。ちったあ、俺にも事情くらい話せよ。

俺はお前らを心配してやってるってのにさー」

「誰も心配してほしいとは言っておらぬわ！」

ギルダとレアラが睨みあってる所を私は止めに入る。

「レアラ落ち着いて。ギルダさんには何かとお世話になってるのよ。  
あんまり怒らないで」

私に言われレアラは渋々引き下がる。

「リコは話がわかるね。そっちの譲ちゃんと違って」

ギルダの挑発にレアラがまた何か反論しようとしたが、私は腕をレアラの前に出し止める。

「ギルダさん用件は何ですか？ちょっと今私達は取り込んでて」

ギルダは私の話を聞いた後、レアラの手元に視線を当てる。

「取り込んでるのはその妖精の事か？」

ギルダの一言にレアラは驚愕する。

「そなた、この妖精がまだ見えるのか?!」  
「ん? まあな」

ギルダはそれだけ応えると、外郭を飛び越しレアラに歩み寄る。そのままじつとレアラの手の平を見つめる。

「こりゃ、まもなく消えるな。妖精がこんなになるなんて初めて見た。

この妖精の持ち主は誰だ?」

ギルダはレアラと私を交互に見る。

「わ・・私ですけど・・?」

私が返事をする、じつと見つめてきた

「妖精は大事にしるよ。命に関わるからな」

そう言くと、ギルダはレアラの手の平から妖精を掬う仕草をする。

そして、私に手を広げるよう促す。

ギルダは私の手の平に何かを乗せる仕草をした。

「そのまま動くなよ」

ギルダはそれだけ言っていると目を閉じた。

私とレアラは何をするのか気になり、視線をギルダと自分の手の平を交互させる。

ギルダはいきなり何処の言葉かわからない言葉を発した。

すると、私の体が青く光始めた。

「何!?!」

私は自分の体を囲む青い光に目を向ける。

次第に青い光に字が浮かび上がった。

レアラはそれを見て驚愕する。

「・・妖精との再契約・・!?!」

ありえない・・こんな事・・」

私は自分の手の平に目を向けると、体を丸めた小さな妖精が目を閉じ座っていた。

「・・・これが私の妖精・・・ルーリ・・・」

声が聞こえたのか、ルーリは目を開けた。

眠りから覚めたように、呆然と周りを見渡している。

私は初めて見る自分の妖精を前に、どうしていいのかわからなかった。

ルーリは視線を動かし、自分の体を支える腕を辿る。

「リコ様・・・リコ様!？」

ルーリは羽を広げ私の頬に抱きついてきた。

「リコ様、リコ様、リコ様!」

私はルーリの頭を指先で撫でた。

「ルーリ、初めまして」

「え?あ!・・・ルーリです!リコ様!」

ルーリは頬から離れ、高揚したまま私の前で羽を広げてお辞儀をする。

私はルーリに会えて良かったと心から思った。

それに応えるようにルーリも満面の笑みを返してくれた。

「ギルダさんありがとうございます!」

私はギルダの方へ向きお辞儀をする。

すると、ルーリも宙で私の真似をする。

「ありがとうございます!」

ルーリは興奮しているのか、言葉が可笑しかった。

ギルダは少し照れた表情をする。

「まあ、良かったんじゃないか?」

私とギルダが話をしてる間、レアラは一人覺束ない表情をしていた。  
「レアラどうしたの？」

「え？いや、何でもない」

私はレアラの仕草が妙に気になった。

しかし、ギルダが口を挟む。

「おっと、用件を忘れるところだったぜ。

フィレーネがレアラをお呼びだ。恐らく、明日に村を出る件だろうな」

「ギ・ルダ・・・、童はリコ達と一緒にいきたいんじゃないが・・・」

レアラは言い難そうにギルダを下から見つめる。

「さあな。それは俺が決めていい事じゃない。

とりあえずフィレーネの所へ行ってくれないか？

話はそれからすれば良い」

「うむ・・・。わかった」

俯くレアラ。

「レアラ・・・」

私はどう声をかけて良いのかわからなかった。

「それじゃ、童は行くな。リコ、迷惑かけた・・・」

それだけ言うと、俯いたままギルダと歩いて行った。

「待ってるからね！」

レアラの背中へ声をかけると、

レアラは微かに頷いた様に見えた。

私は一人、二人の背中をじっと見つめていた。



## リコとレアラ（後書き）

読んでいただきありがとうございます！  
では次回18話でお会いしましょう！

## 凶報（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます！  
今回はギルダがメインになっています。  
ではメイアスの世界へどうぞ！

## 凶報

私は頭上に座るルーリと共に、ケイトとの待ち合わせの民家へ向かって大通りを歩いていった。

「リコ様？」

ルーリは私に声をかける。

「ん？どうしたの？」

「いえ・・・、リコ様元気なさそう・・・」

「え？あ・・・、そうかな・・・？」

私はルーリに言われ、自分が難しそうな表情をしていた事に気付く。正直なところ、ギルダと共にフィレーネの所へ向かったレアラの事が気になっていた。

慌てて表情を元に戻すが、ルーリは心配そうに私を見つめてくる。

「リコ様・・・」

「ごめんね、ルーリ。私は大丈夫だよ。少し疲れが出ちゃったのかな」

私は笑顔を無理やり作って見せた。

そんな時、前方から声が掛かる。

「リコ！」

私はそれがケイトの声だと気づく。

「あ、ケイト」

ケイトは私の前まで走ってきた。

「リコ、何処行ってたんだ？いつまで経っても来ないから心配したぜ？」

ケイトは私を見つめていたが、何かに気付き視線を私の頭上に向ける。

「あ、ルーリ！」

「ケイト様！」

ルーリは私の頭の後ろに隠れていたが、走ってきたのがケイトだとわかると前へ飛び出した。

そして、そのままケイトの肩へと降り立つ。

「ルーリ、無事だったんだな」

「はい！ケイト様のおかげでリコ様に会うことができました。

さすが、リコ様の旦那様です！」

「お・・・おう！・・・。」

ケイトは冷たい目線に気付き、動揺しつつ私をちらちら見る。

「ルーリ、ケイトは別に旦那じゃないわよ？」

何でも信じちゃだめよ？」

「え？そうなんですか？でも・・・。」

ルーリは、私とケイトの顔を交互に見やる。

「とにかく、夜も遅いし私達も寢床へ向かいますよ」

「そうだな」

「はい！」

私の言葉にルーリとケイトは同意した。

ルーリが私の頭上に戻ると同時に、村外れのフィレーネさんに教えてもらった民家へと歩き出した。

「ところで、どうして遅くなったんだ？フィレーネさんと話すだけだろ？」

私はレアラと会った事を話そうか迷った。

「レアラと会ったのよ」

ケイトは、私の少ない言葉から何かを感じ取ったのか窺うように見つめてきた。

「此処にレアラがないって事は、俺達とは来ないのか？」

ケイトの質問に対して私は言葉を詰まらせる。

レアラと直接話をした私でさえ返答に難しい。

沈黙する私に対してケイトは淡々と言葉を放つ。

「何があつたかわからねえが、レアラなら俺達と来るだろ」

全てを知つたような口調で軽々しく言うケイトに、私は苛立ちを覚え立ち止まり後方にいるケイトに振り返る。

「何を知つてそんな事が言えるの?! 何も話してないのに!」

私の怒声に対して、ケイトは困つたような表情をした。

「いや、ほら、俺達仲間だろ? 少なくとも俺はそう思ってるぜ?」

ケイトの言葉に対して私は返す言葉を失つた。

「それに、もし此処で俺達と別行動を取る事を選択したとしても、レアラはまた俺達の所へ戻ってくる気がする。なんとなくだけだな」

私はケイトの言葉に体を振るわせた。

自分自身に怒りを覚えたからだ。

「そつだね……。ケイトありがとう」

私はそれだけ言うつもりを頭上に乗せたまま歩き始める。

そんな私に対して、後ろをついてくるケイトは短く言葉を返してくれた。

「おう」

ルーリは頭上から私の表情を覗き込んだ後、私の気持ちを汲むかのように笑顔を向けてくれた。私も釣られて笑顔になる。

ルーリは羽を広げて飛ぶと、私の頭上から肩へと移動した。そして、私の耳元へ小声で呟く。

「ケイト様はリコ様が好きなんですよ」

私は歩きながら小さな声で応えた。

「わかってる」

そう言うと、私はルーリの頭を優しく撫でた。

時を同じくしてギルダとレアラは一人で裏通りを歩いていた。

「一つ聞いてもよいか？」

「ん？何だ？」

「お主何者じゃ？」

レアラは真剣な表情でギルダを見上げる。

「精霊との再契約は童達王族にすらできない芸当じゃぞ？」

それに、再契約の時に浮き出た文字・・・あれは間違いなく・・・」

ギルダはレアラに問い詰められ、難しそうな表情で頭を掻く。

「良く分かんが、まあ、いいじゃねえか。結果オーライだったんだろ？」

「それはそうじゃが・・・」

「なら、良かったじゃねえか。」

そう気にするな。悩みすぎると可愛い顔に皺が寄るぜ?」

「ちよ!? 失礼な奴ね!」

レアラの反応にギルダは楽しそうに笑った。

そんなギルダにレアラは再度真剣に見つめる。

「童は・・・そなたに感謝しなければならない・・・。」

理由はどうであれ、リコとルーリの関係を取り持ってくれたのだからな・・・」

レアラの真剣な眼差しに対して、ギルダは緩く見据えレアラの頭に大きな手の平を置く。

「譲ちゃん、感謝はいらねえ。」

その代わりと言っちゃなんだが、一つだけ頼みを聞いてくれないか?」

「な・・・なんじゃ?」

レアラはギルダからの突如な提案に動揺する。

「今は言えん。その時が来たらだな。」

「そ・・・そうか・・・」

レアラは頼みごとの内容が気になったけれど、今はそれ以上何も聞かなかつた。

聖騎士団の宿舎では、フィレーネやソフィアを筆頭に聖騎士団員達が集まっていた。

そして、フィレーネの前に膝を突き、所々破けた聖騎士団の服を着た男性が一人。

男性は唇を噛み締め拳を強く握っていた。

「ジン、報告を受ける。顔を上げなさい」

フィレーネの言葉に、ジンと呼ばれた二十歳前半程の若い男が顔を上げる。

「第一聖騎士団隊員ジンです……。伝令を申し上げます！」

ジンは喉に何かを詰まらせた様に苦痛の表情で言葉を止める。

「第一聖騎士団と第二聖騎士団は……。全滅しました……」

ジンの報告に宿舎の中が静まり返る。

ある者は大きく唾を飲み込む。

ある者は驚きの表情をしたまま固まった。

そんな中フィレーネがゆっくりと口を開く。

「言ってる意味が……。わからない……」

「全滅……です。自分以外……。生存者は……。ありません……」

ジンの言葉にフィレーネは再度固まった。

宿舎の中でソフィアだけは冷静にフィレーネを見つめる。

そんな中ジンはゆっくりとフィレーネに向けて手の平を出す。

そこには誰もが知る聖騎士団総隊長の証である、ライオンの絵が書

かれた指輪があった。

「聖騎士団総隊長ジェレス様から・・・フィレーネ様へと・・・」

フィレーネは無理やり口から言葉を紡ぎ出す。

「ふ・・・ざけるな！でたらめ抜かすな！」

フィレーネは苦渋の表情で見つめてくるジンを睨み叫ぶ。

「ジェレスお爺様は聖騎士団最強の剣士だ！死ぬわけが無い！出て行け！！」

フィレーネは大声で叫び息を荒くする。

それでもフィレーネをじっと見つめるジン。

ジンの真剣な眼差しがフィレーネを苦しませる。

見かねたソフィアがジンの前に立つ。

「ジンさん申し訳ありませんが、今は少し別の宿舎で体を休めてください。」

後程もう一度伺いますので」

それだけ言うと、壁際に立つ数名の聖騎士団員達に目で促す。

2人の聖騎士団はジンの両脇に立ちジンの体を支える。

ジンは懐から血で染まった布を出し地面に敷き、指輪をその上に乗せた。

ジンは、それから2人の聖騎士団に体を支えられながら立ち上がり出口へ向かう。

ジンは数回フィレーネの方を振り返ったが、フィレーネは地面に置かれた指輪に釘付けだった。

ジンが宿舎から出て行った後、ソフィアは他の聖騎士団員達にも後で出直すように申し付けた。

部屋の中には呆然と指輪を見つめるフィレーネとそれを見つめるソフィア。

しばらくしてフィレーネは小さな声を紡ぎだす。

「ど・ど・ど・どう・思う・？これは・？・真実か・？」

フィレーネは誰に問うでもなく、ただ呆然と指輪に向かって問いた。

もちろんだが指輪は返答しない。

しばらくしてソフィアが代弁するように言葉を紡ぐ。

「恐らく・・・」

ソフィアがそれだけ言うと、フィレーネは唇を噛み締めて宿舎を出て行った。

ギルダとレアラはフィレーネの指定する宿舎前に辿りついた。

しかし、聖騎士団が中にいる時に感じられるいつもの活気が感じられなかった。

「やけに静かだな・・・まあ、中に入ればわかるか」

ギルダを先頭に中へ踏み入るとソフィアが一人佇んでいた。ソフィアは布に包まれた指輪をじっと見つめている。

「おい、ソフィア。フィレーネはどうした？それに他の奴らもいねえし」

ソフィアは指輪を布に包んで懷に仕舞うと、ギルダとレアラに目を向ける。

「今は一旦休憩ですわ」

ソフィアはそれだけ言うと、片隅に置かれた椅子を引っ張り出し机に添える。

「レアラ様とギルダさん、とりあえず座って頂いても？立ってられると気になりますの」

「ん？ああ。譲ちゃんも座んな。ソフィアが水でも出してくれるかもしれないぞ。」

レアラもギルダに促され椅子に腰掛ける。

ソフィアは棚からカップを取り出し水を入れ、レアラとギルダの前に差し出す。

レアラは喉が渴いていたのか一気に飲み干した。

ソフィアはレアラの背後に立ち、ギルダに手で外へ出るように促す。ギルダはそれに気付き立ち上がる。

「譲ちゃん、俺の水も飲んでいいぞ。ちょっと休んでくれ」

「う・・・うむ。了解した」

レアラはギルダの行動が気になったのか首を傾げる。

そんなレアラを他所にギルダはソフィアに続いて外へ行ってしまった。

「ふむ。急にどうしたんじやる……。まあいつか」  
レアラは一人机の上に突っ伏した。  
「うむ。どうしたものか……」  
レアラは呟くと同時に疲れが出たのか寝息を立て始めた。

ギルダはソフィアについて行くと聖騎士団宿舍の裏手で足を止めた。  
「此処なら人目は無いでしょう」  
そう言うと、ソフィアはギルダの方へ振り返る。

「単刀直入に言いますね。第一聖騎士団と第二聖騎士団は全滅したとの一報が入りました」  
ソフィアの言葉に、ギルダは微かだが驚きの表情を見せる。

「それでこの有様か」  
納得したかのようにギルダは一人頷く。  
「フィレーネはどうした？」  
「飛び出したきり戻ってきていませんわ」  
ソフィアの言葉を聞きギルダは考え込む。

「報告者の名前は？」  
「ジンさんです」  
「あいつか……」  
「知ってるんですね」  
「まあな。爺さんの所で厄介になってたときにちょっとな」

ギルダは何かを思い出す素振りをしていたが、  
改めてソフィアを見る。

「フィレーネなら今からどっついう行動を取るか予想できてるはずだ。そうたる?」

「ええ。ですが、私の力では拮抗が限界です。だから貴方を此処に呼んだのですわ。」

「だらうな」

そう言うとギルダはソフィアに背を向ける。

「時間がなさそうだ。そろそろ行く。」

最後にジンの場所を教えてください。」

「この宿舎の向かい側にある民家にいるはずですよ」

「はず・・か。何処まで仕事させる気だよ。副隊長」  
それだけ言うとギルダは走り出した。

ソフィアはその背中を見つめ、ギルダが見えなくなると呟いた。

「貴方が此処にいて良かった。そう思えますわ。頼みます」

ソフィアは自分がその役割ができなかった事に対して、悔しさと感謝を籠めて軽く頭を下げた。



## 凶報（後書き）

読んでいただきありがとうございます！  
では次回19章で会いましょう！

## 凶報2（前書き）

こんにちは。大分遅れた更新ですが、またよろしくおねがいます。  
本編へどうぞ！

## 凶報 2

ギルダは、ソフィアと別れた後すぐにジンがいると言われた民家へ向かった。

「ジンの事だ。恐らく・・・」

ジンがいると言われた民家の戸を開くと誰もいなかった。

「やっぱりか・・・。となると・・・」

ギルダはそのまま馬小屋に走る。

夜中だった為大通りには人通りが少なく走りやすかった。

馬小屋に着くと、夜だった為か聖騎士団の馬小屋を管理する人がいなくなっていた。

一通り馬小屋の中を歩くと無理やり切り裂かれた馬の縄があった。

「ビンゴか・・・」

ギルダが切られた縄を見つめていると、背後から人の気配が近づいてきた。

振り返り気配の正体を確かめると、聖騎士団員の服を着た男性だった。

聖騎士団員は馬小屋にギルダがいることに気付くと、

あまりに真剣な表情のギルダに驚きギルダの方へ走り出した。

「ギルダさん、どうされたんですか？」

ギルダは何も言わず切られた縄を差し出す。

「これは・・・」

聖騎士団員は縄を見た後、再度ギルダに視線を戻した。

「恐らく誰かが馬を使った。ヴォルデに許可無くだ」

ヴォルデはギルダのいつにも増して凄みのある声に視線を外せなか

った。

「おい、この中で一番早い馬を貸してくれ」  
ギルダの突然の言葉に驚くヴォルデ。

「この中ですか・・・」

ヴォルデは眩きながら馬小屋の中を見渡す。

困りきった表情で馬達を見つめるヴォルデを見てギルダも一緒に見渡す。

「あれはどうだ？」

ギルダが指差した馬は、馬小屋の横に立つ木に縄で括りつけられていた。

ヴォルデはそれを見て言い難そうな表情をした。

「あれは我ら聖騎士団の馬ではございません。フィレーネ様に頼まれた旅のお方の馬ですよ」

ギルダはヴォルデの言葉を聞くと、真つ先にケイト達の事を思い浮かべた。

「そう言えば、あいつらと一緒に居たな・・・」

ギルダはそれだけ言うと、何かを決めたような表情をした。

「あの馬を借りる」

ギルダはケイト達の馬を見つめた。

それを見てヴォルデは逆に慌てる。

「だめですよ・・・」

あれはフィレーネ様に言われ、特別に管理するよう言われた馬なんですから・・・」

ヴォルデの忠告を無視し、ギルダはリコの馬セリスに近づく。ヴォルデはギルダの腕を引っ張るが成すがままに引きづられて行く。セリスを真近で全身を見渡すように見つめる。

「あの時は気付かなかったが良い馬だぜ」

「だ〜か〜ら〜だめですって・・・」

ヴォルデは腕を強く引っ張るがギルダはお構いなし。

「ヴォルデ、お前に責任はないから安心しろ。それに俺はその旅人の師匠なんだから問題ないぞ」

ギルダの説得にヴォルデは何の事か理解できていなかった。

「意味がわかりませんよ・・・」

ヴォルデが泣き言を言う傍ら、ギルダはセリスの縄を切り跨る。

「ん？・・・そうか、こいつはリコの方の馬か。まあどうでもいいが」

ギルダは一人言を漏らすと同時に馬を歩かせた。

それを呆れた表情で見つめるヴォルデ。

「それじゃ後の事は頼んだぜ」

ヴォルデに向けてそれだけ言うと、馬を走らせ村を出て行った。

小さくなっていくギルダの背中を見つめるヴォルデ。

「はぁ・・・。これがばれたら又怒鳴られる・・・。」

ほんと・・・あの人は入団直後からむちゃくちゃだあ・・・」

ヴォルデは頭を抱えて馬小屋へ戻っていった。

ソフィアが聖騎士団の宿舎へ戻ると、レアラは気持ち良さそうに眠っていた。

「あらあら」

ソフィアはそう言うと、気持ち良さそうに眠るレアラに近づき横顔を見つめる。

辺りを見回し、椅子にかけられた毛布を手にとってレアラの背中にかけた。

「風邪を引いてしまいますわ」

ソフィアは眠るレアラに優しい表情で見つめる。

「ネリス・・・」

ソフィアはレアラを見つめながら呟いた。

しかし、同時に頭を振った。

「死んだ娘の事を思い出すなんて・・・」

ソフィアは頭を切り替えると、近くに書いてあった紙を手に取り何かを書き始めた。

そして、レアラの傍に紙を置くと宿舎を出て行った。

ソフィアは宿舎を出ると同時に気を引き締め、そのまま数箇所ある別の宿舎へ向かった。

その途中で、ギルダの部下であるセルベルトと遭遇した。

「あ、ソフィアさん。うちの小隊長知りませんか？  
何処探してもいないんですよ」

「ギルダさんなら・・・」

ソフィアはセルベルトにギルダの行方を言いかけて途中でやめた。

「何かギルダさんに？」

「えっと、ギルダさんからアシスの隠れ里の情報を諜報するよう言われたんですよ。」

その報告をしたくて探してるんです」

ソフィアは関心した表情を見せる。

「ギルダさんはしばらく戻りませんわ。それと・・・、  
その情報お聞きしたいのですがよろしいですか？」

「え？あ・・・はい。ですが、まずは小隊長に報告を・・・」

セルベルトが律儀な男だと言う事はソフィアも知っていた。  
その為、規律をしっかりと守る男だと言う事も。

ソフィアは急に頭を下げた。

「お願いしますわ。その情報を・・・」

「ソフィアさん止めてください・・・。わ・・・わかりました・・・」

ソフィアの行動にセルベルトは動揺し周囲を確認する。

セルベルトは誰にも見られてない事を確認すると胸を撫で下ろした。

「ですが・・・、一つ条件があります」

セルベルトの突然の申し入れにソフィアは啞然とする。

「正直にギルダさんの行方を教えてもらえませんか？」

セルベルトの質問にソフィアは口を中々開けなかった。

ソフィアは何かを考えるようにじっとセルベルトを見つめる。

「わ・・・わかりましたわ。では一緒に来てください」

ソフィアはそれだけ言っているとセルベルトの横を通り過ぎ歩き出す。

セルベルトはそのままソフィアの後を追った。

ギルダは一人月の光に照らされながら、荒野の真ん中で地面についた蹄の後を調べていた。

「まだ新しいな」

ギルダは馬の蹄の近くに何か液体が垂れた痕跡を見つけた。

その液体を砂ごと掬いあげ月光に照らし、同時に匂いを嗅いだ。

「血か。怪我してるのか・・・」

ギルダは蹄の跡が続く先を見つめる。

「無茶しやがる」

それだけ言っていると再度馬に跨り走らせる。

「聖騎士団は人情に厚い奴らばっかだな。それも良し悪しってところか」

ギルダは呟くと同時に更に馬を加速させた。

リコ達はフィレーネの用意してくれた宿舎に着いた後ケイトと別れた。

私とルーリは明日からの長旅に備え体を横にした。

「こんな時間にギルダさんとの待ち合わせなんて何かあるのかな？」

「うーん。どうなんでしょうか。検討がつきませんです。はい」

私の質問にルーリは困った表情で首を傾げた。

そんなルーリを見ているうちに、ふと思ったことを口にした。

「ルーリはあのまま私と会えず、消えてたらどうなったの？」

「どうなったと言われましても……。たぶん精霊界へいくと思います。」

「精霊界？」

「はい。精霊界は私達の故郷のようなものですね。」

人が踏み入れる場所ではないですから、わからないかもしれませんが……」

「へー。そんな世界があるのね」

私は見知らぬ世界に興味湧き、それが表情に表れていたのかルーリは付け足すように口を開いた。

「精霊と言うのは元々人間には見えないんです。ですが、レアラ様やギルダ様みたいに特殊な方もいるんですよ。」

私にもわからない事が多すぎます。はい」

「テリアスやルーリは妖精じゃない？妖精は精霊の結晶体であつてよね？」

「はい。私やお母さんは精霊の結晶体であつてますよ」

「お母さんが言つてた事はやっぱり本当だったんだ」

私は、口煩くも色々と教えてくれた母に少しだけ感謝した。母の事を思い出したせいも、心の奥がむず痒くなった。

「ねえ、ルーリ。お母さんに会いたい？」

私の質問の意味がわからないのか、啞然とした表情で私を見つめる。

「テリアス様にですか？」

「うん」

私は真顔でルーリに頷く。

すると、ルーリはゆっくりと私の胸辺りを指差した。

「私のお母さん、テリアス様はリコ様の中にいますよ？」

ルーリはそれだけ言うと、首を傾げながら私を見つめた。

「そっか。そうだったね。変な事聞いてごめんね」

私は余分な事を言つたと思ひ謝罪する。だが、かえつてルーリを混乱させたらしく、

なぜ謝られたのか気にしていた。

私達人間から見て、ルーリ達妖精の多くは謎に包まれてる部分が多い。

でも、ルーリが”テリアスは私の中にいる”と言つのならきつてるのだろう。

私は胸に手を当て、改めて命を救つてくれたテリアスに心の中で感

謝した。

「もう寝ようか」

「はい！おねむです！」

ルーリは手を挙げ私に同意した。

ルーリはどんな仕草をしても可愛かったので、私はつい頭をなでてしまった。

ルーリは嬉しそうな表情をした後で目を瞑った。

ルーリの寝顔が可愛くて、私はしばらく見つめていた。

すると、ケイトが訝しげな表情で帰ってきた。

「早かったのね。もう用事済んだの？」

「いや、済んでないけど帰ってきた。」

「どう言う事？」

「いや・・・ギルダさんが待ち合わせの場所に来ないんだよ。

探したけど見当たらなかったし。」

「聖騎士団の宿舎も行った？」

「行ったけど、電気もついてなくて真っ暗だったから帰ってきた。

それと・・・」

ケイトはどう説明したらいいのか迷っていた。

「どうしたの？はっきり言いなさいよ」

私が問い詰めると迷った拳句口を開いた。

「いやぁ・・・そこでフィレーネさんを見かけたんだけど、血相変え

て走って行ったんだよ。  
声かけたんだけど、無視して行っちゃうし」

私は”血相を変えて走って行った”という所が妙に頭にひっかかった。

フィレーネさんと数回だが話をした時に、冷静な人だというイメージがあつたから。

ケイトは戸を閉め、私とルーリを踏まないように飛び越して奥へ座った。

「村の様子は？」

私はフィレーネさんの事が気になりケイトへ問い合わせる。

「村？特に何も無かつたぞ？静かなもんさ。」

でも、あんな物騒な格好して何処行くんだろっな」

「は？物騒って？」

「鎖帷子の様な物着てたぜ。人目を気にしながら走っていた様にもみえたな」

ケイトは天井を見上げながら、先程の光景を思い出すように喋った。

私は自分の体にかけてあつたタオルを横へ外し体を起した。

「どうしたんだ？」

「ちよつとフィレーネさんの行動が気になるのよ。」

少し外を歩いてくるわ」

私は横で眠っているルーリを起さないように立ち上がる。

「俺も行くつて。それにルーリはどうするんだよ。」

目を覚ました時リコがないとたぶんコイツ泣くぜ？」

ケイトに言われルーリをじっと見つめる。

ルーリは私をお母さんだと半分思ってるかもしれない。私がいなかったらこの子は泣くだろう。

そう思うだけで胸が苦しく、ルーリの泣き顔はあまり見たくなかった。

私はそっとルーリに呟く。

「ルーリ、少し出かけてくるけど・・・一緒に行く？」

「はふにゃはにゅはふ・・・」

ルーリは瞼を半分開けて私に何かを言っている。

何を言ったかわからないが、ルーリは自分にかかったタオルを隅へ避けふわふわと飛んだ。

そのまま私の肩へ着地し、またうとうとした。

私は心の中でルーリに謝罪し、ケイトに視線を移す。

「行くわよ」

「おっけ！」

ケイトは私に呼ばれる事を待ってたかの様に勢いよく返事をした。







## 凶報2（後書き）

読んでいただきありがとうございます。  
では次回20章で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7332v/>

---

七つの宝玉

2011年10月17日01時58分発行